月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.114



王都グランセルに
降り立つ執行者たち
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～

こんな尋問官はあり得ない!?
も～っと集まれ！
ファルコム学園

『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡
ファルコムニュース

夏と言ったらやっぱりこの衣装！
『英雄伝説 暁の軌跡』

いよいよ発売まで1ヶ月！　旧Ⅶ組メンバーほか
16キャラの新情報が一挙に到着!!

英雄伝説 創の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

3 目次

4 いよいよ発売直前！　一挙16キャラが登場！
『英雄伝説 創の軌跡』

16 も～っと集まれ！ファルコム学園
新久保だいすけ

25 英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～
啄木鳥しんき

40 ファルコムニュース

46 夏と言ったらやっぱりあの衣装！
『英雄伝説 暁の軌跡』

48 『軌跡』シリーズの始まりを振り返る！
英雄伝説 空の軌跡 2
黒のオーブメント
著：はせがわみやび　イラスト：ワダアルコ

いよいよ発売まで１ヶ月！
最後に旧Ⅶ組メンバーが一挙揃い踏み！

THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】



いよいよ発売まで１ヶ月を切った軌跡シリーズ最新作『創の軌跡』。発売直前号ともなる今回は、“エンペラー”を名乗る謎に包まれた新キャラクターのほか、『閃の軌跡』シリーズからアリサほか旧Ⅶ組メンバーが一挙大登場！　さらに、新たなミニゲームやエピソード情報も到着した！

『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：2020年8月27日
ジャンル：ストーリーRPG　**対応機種**：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人
小売価格：［通常版］7,800円（税抜）［Platinum マイスター BOX］10,800（税抜）
［ダウンロード通常版］7,590円（税込）［デジタルデラックス版］11,000円（税込）
［シーズンパス］4,180円（税込）
CERO レーティング：C

※画面は開発中のものです。

エンペラー

CV：柳田淳一



「我自らが“再教育”し、“最強の凶器”に育て上げてやろう」

とある“組織”で幹部を務め、自らを皇帝（エンペラー）のコードネームで呼ぶ謎の男。
組織の下位構成員を道具として酷使し、脱走者には無慈悲な死を与える非情な性格をしている。
重力操作を可能とする金色の古代遺物（アーティファクト）を身に付けておりその圧倒的な重力攻撃によって数多の肉体を押し潰してきた。
何者からの支援を受ける形でかつて組織から脱走した構成員二名を追跡しているようだが……。

アリサ・ラインフォルト

CV：堀江由衣



「後始末は必ずつけてみせます。RF関係者として、何よりもフランツ・ラインフォルトの娘として」

帝国最大の重工業メーカー、RF（ラインフォルト）グループ令嬢にして旧《Ⅶ組》メンバーの一人。
《巨イナル黄昏》では地精（グノーム）の出現により母や使用人のシャロンと敵対することになったが、その後、自らの意志で二人を取り戻し、亡き父・フランツとも奇蹟的な邂逅を果たした。
現在はＲＦ社の第四開発部室長として業務に励む傍ら、タングラム要塞の解体手続きなど、クロスベル再独立に向けた事後処理にも協力。
帝国やクロスベルでの事件を通して知り合った《特務支援課》のエリィとも個人的な親交を深めているという。





ラウラ・S・アルゼイド

CV：伊瀬茉莉也

旧《Ⅶ組》メンバーの一人で、若干19歳にして奥義を皆伝した武の名門・アルゼイド子爵家の息女。
父アルゼイド子爵との修行で師範代となってからは武者修行を兼ねて帝国各地の練武場をまわり、時にはリィンたち新《Ⅶ組》に手を貸していた。
帝国を襲った災厄《巨イナル黄昏》では"呪い"の影響で敵となった父と剣を交え、アルゼイド流伝承者として見事勝利を収めた。
一人の剣士として恥じない生き方を求め、災厄が過ぎ去った後も己のアルゼイド流剣術を磨き上げる日々を送っている。



「強いな、そなた……途轍もなく……!!」





エリオット・クレイグ

CV：白石涼子

帝国軍の猛将《紅毛のクレイグ》の長男にして旧《Ⅶ組》メンバーの天才音楽家。
トールズ士官学院、帝都の音楽院を経てプロの音楽家になってからは音楽の力で人々を平和に導く手段を模索しつつリィンたち新《Ⅶ組》の活動をサポートしていた。
災厄後は音楽の力で帝国の人々を元気づけるために巡業活動を再開。
更に、今年から聖アストライア女学院で臨時の音楽教員を務めるようになり、才能溢れる若手講師として女学生から注目を集めている。



「現代の技術では解析できない"早すぎた女神の贈り物"、か……」

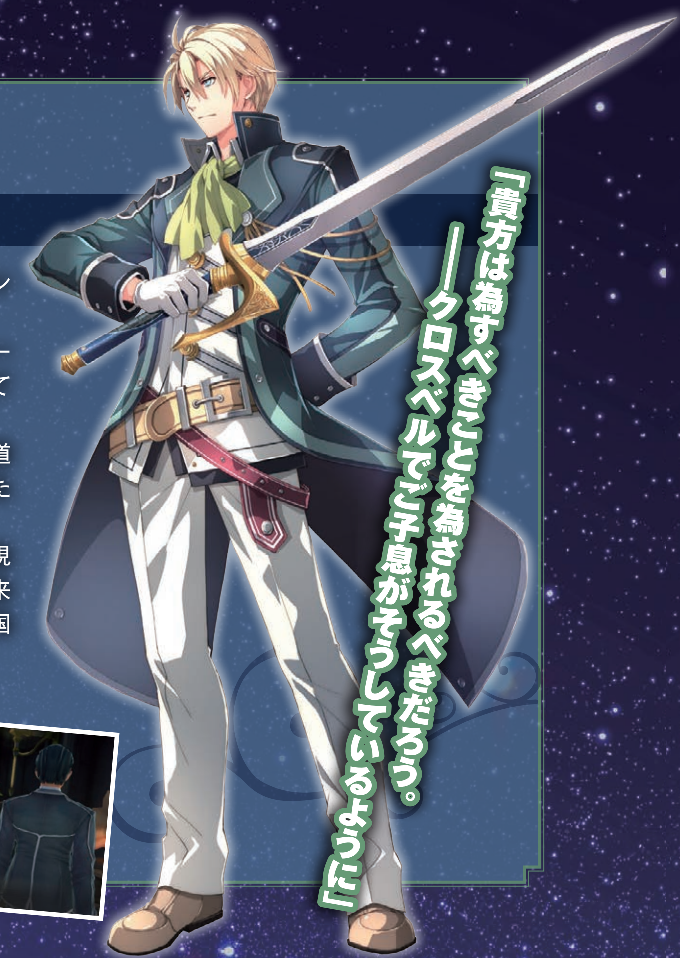




ユーシス・アルバレア

CV：立花慎之介

四大名門・アルバレア公爵家次男にして帝国クロイツェン州を治める若き貴公子。
トールズ士官学院卒業後は内戦で捕縛された父や兄ルーファスに代わり、領主代行として帝国東部の領民を支えていく道を選択。
《巨イナル黄昏》では欺瞞に満ちた公爵家に絶望し人の道を踏み外そうとした兄との最後の戦いに挑み、長く続いた兄弟の確執に決着をつけた。
災厄後は"貴族の義務（ノブレス・オブリージュ）"を体現する存在として各地の貴族と連携し、帝国の進むべき未来を模索するように。そんな中、リィンに協力する形で帝国のある事件に関わっていくことになるが……。



「貴方は為すべきことを為されるべきだろう。——クロスベルでご子息がそうしているように」





マキアス・レーグニッツ

CV：佐藤拓也

帝国政府暫定首班、カール・レーグニッツの実子にして秀才肌の生真面目な司法監察官。
トールズ士官学院や帝国内戦での経験をきっかけに政治学院での勉学に励み、「司法監察院」へ就職する道を選択。
《巨イナル黄昏》では国家総動員法による監察院の有形無実化、父との対立といった窮地に立たされながらも最後まで"法"の番人として自分自身の正義を貫き通した。
災厄後は再独立を控えたクロスベルで監察業務を担当。日々の激務をこなしながら、現地で暮らす人々とも交流を深めているらしい。



「ただ"恩返し"したかったからじゃない。貴方たちの正義の在り方が尊敬できたからです」





エマ・ミルスティン

CV：早見沙織



「私——巡回魔女としてゼムリア大陸の平和を守っていきたいの」

帝国に伝わる古の存在《魔女の眷属（ヘクセンブリード）》にして旧《Ⅶ組》メンバーの一人。
早くに母を亡くしている事もあり、魔女の長ローゼリアは祖母、同じ里で育ったクロチルダは彼女にとって姉のような存在。
学生時代に起こった帝国内戦をきっかけに素性を明かし、以降、優れた導力魔法の使い手として、魔女の一人として新旧《Ⅶ組》をサポートしてきた。
《巨イナル黄昏》後に使い魔セリーヌと共に故郷エリンの里へと戻ったが、現在は災厄時に異常を起こしていたゼムリア各地の地脈を確認し、鎮めて回るという活動を続けている。

フィー・クラウゼル

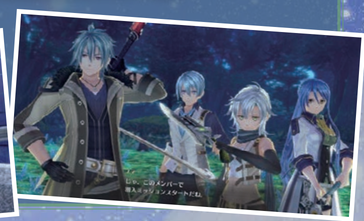
CV：金元寿子



「遊撃士としては気が進まないけど、“猟兵流”で試してみる?」

並外れた身体能力を持つ、猟兵団《西風の旅団》出身の若手女性遊撃士。
かつては猟兵として戦場に身を置いていたが、遊撃士サラとの出会いやトールズ士官学院《Ⅶ組》の生活がきっかけで正遊撃士資格を取得し、サラとコンビを組むようになった。
災厄《巨イナル黄昏》では猟兵時代の育ての親ルトガー団長の死を“娘”として見送り、これからも遊撃士としての人生を歩んでいくことを決意。
現在は猟兵時代の異名《妖精》を冠する若手遊撃士としてメキメキと頭角を現しており、協会からも有望株として将来を期待されている。





ガイウス・ウォーゼル

CV：細谷佳正



「反旗を翻し、クロスベルを占領したテロリストたち、か……」

遊牧民族「ノルドの民」の出身で七耀教会の《星杯騎士団》に所属する守護騎士の一人。
四人兄弟の長男で面倒見がよく、先入観にとらわれず物事の本質を見定めることが出来るため旧《Ⅶ組》メンバーをはじめ周囲からの信頼は厚い。
トールズ卒業後、とある事件がきっかけで“聖痕”を受け継ぎ守護騎士第八位《絶空鳳翼》として帝国を襲った災厄《巨イナル黄昏》に立ち向かった。
その後はノルド時代からの相棒・鷹のゼオと共にゼムリア各地で《星杯騎士団》の任務にあたっていたが帝国で発生したある事件のカギを掴むため、家族が暮らす故郷・ノルドの地を再び訪れることになる。



ミリアム・オライオン

CV：小岩井ことり



「アーちゃん、ボクたちも負けてられないね!」

旧《Ⅶ組》メンバーの一人で、無邪気で人懐っこい性格の少女。
その正体は地精（グノーム）によって生み出された人造人間（ホムンクルス）であり同じ境遇で妹にあたるアルティナのことを誰よりも可愛がっている。
《白兎》のコードネームで帝国軍情報局に所属し、エージェントという立場を活かして新旧《Ⅶ組》を支援していたが地精らの暗躍により命を落としてしまう。
しかし、聖女アリアンロードが最後に与えた力や騎神、魔女たちの協力によって新たな身体を得ることとなり、災厄《巨イナル黄昏》が過ぎ去った後は再び情報局で元気に活躍する姿を見せるようになった。





緋のローゼリア

CV：水橋かおり



「泣くなとは言わぬ。ヌシには、生き方を選ぶ運命（さだめ）があろう」

幼い容姿ながら老成した口調が特徴的な、齢800歳を超える《魔女の眷属》の長。
セリーヌの生みの親にあたり、エマにとっては魔術の師であり、祖母のような存在でもある。
その正体は空の女神に遣わされた《聖獣》でクロスベルの地を見守る《神狼》ツァイトと同格の存在なのだが、流行りの文化やジャンクフードを好み、生活態度がずぼらなためエマに叱られることもしばしば。
帝国を襲った災厄《巨イナル黄昏》が過ぎ去ったことで“霊脈”の歪みも消滅したことを確認し、長としての務めは一段落したはずだったのだが……。



セリーヌ

CV：相沢舞



「と、当然よ！これでもロゼの後継者なんだから！」

人語を操る黒猫にして、《魔女の眷属》であるエマの使い魔。エマにとってはお目付け役のような存在でもある。
魔女の長ローゼリアによって生み出されたこともあり潜在的な魔力は非常に強く、本人の意思で人型に変身することもできる。
リィンとはトールズ士官学院の頃からの仲で、騎神での戦闘をサポートしたり、災厄《巨イナル黄昏》によって贄となってしまったリィンを守ったりとこれまでに何度も窮地を救ってきた。
《黄昏》後、一旦は故郷エリンの里へと戻ったがローゼリアの依頼を受け、“霊脈”に関するある調査に乗り出すことに。



エリゼ・シュバルツァー

CV：後藤沙緒里



「私はもう、兄様に守られるばかりのかよわい存在ではありません」

シュバルツァー男爵家の長女にして《聖アストライア女学院》の学生会長を務めるリィンの義妹。
女学院で知り合ったアルフィン皇女とは中等部の頃からよき理解者であり、親友としての関係を築いている。
義兄のリィンを実の兄以上に慕い、信頼しているらしく帝国での内戦や《巨イナル黄昏》など、これまでに何度も窮地に陥ったリィンを支え、勇気づけてきた。
災厄後、学生会長として女学院での学生生活を送る一方《灰色の騎士》の妹として恥じぬ存在でありたいとヴァンダール練武場に通い、オリエ夫人に剣術の指南も受けているという。



アルフィン・ライゼ・アルノール

CV：佐藤聡美



「事件の鍵を握る仮面の人物。《新生帝国解放戦線》なる組織のリーダー、ですか」

ユーゲントⅢ世の娘にして、イタズラ好きで茶目っ気のあるエレボニア帝国皇女。
《聖アストライア女学院》に通うエリゼとは中等部の頃から親友の間柄でもある。
旧《Ⅶ組》とはエリゼを通じて興味を抱くようになり、その後、内戦や《巨イナル黄昏》を通してアルノール家を巡る数々の悲劇に見舞われながらも一人の人間として大きく成長していった。
《巨イナル黄昏》での出来事をきっかけに消息不明となった双子の弟・セドリックのことを気にかけつつも、現在は国内の反発勢力を抑えつつ、皇女として真摯に国民と向き合っている。



フラン・シーカー

CV：有島モユ



「お姉ちゃん……苦しい道のりだったけど、みんなで一緒に頑張ってきてよかったね」

クロスベル警察の受付・オペレーターを務める女性警察官で警備隊員ノエルの妹。
幼い頃からノエルを「自慢のお姉ちゃん」と慕っており、休みの日は二人で出かけるなど姉妹仲は極めて良好。
乗り物好きで活動的な姉に対し、ぬいぐるみや小物集めが趣味といった女の子らしい面が強いがオペレーターとしての腕は確かで《特務支援課》発足時からロイドたちを支援してきた。
クロスベルの再独立が決定し、姉との平穏な日々が帰ってきたことを警察官の一人として心から喜んでいる。



シズク・マクレイン

CV：井上富美子



「大好きなお父さんと一緒なら、きっとどんな事も乗り越えられるから」

クロスベルの守護神として知られるA級遊撃士、アリオス・マクレインの一人娘。
父親思いの健気で優しい少女で、キーアなどクロスベル市で暮らす同年代の子供たちとも仲が良い。
幼い頃、導力車の爆発事故が原因で視力を失ってしまいウルスラ医科大学で治療を続けていたが、《零の御子》として覚醒したキーアによって視力を取り戻した。
帝国占領期は軍の目が届かないよう、父アリオスがシズクをレミフェリア方面に避難させていたが、そんな中でも、クロスベルで地下活動を続けるロイドやキーアたちに励ましの手紙を送り続けていた。



攻略型コンテンツ「真・夢幻回廊」で解放される 新たなミニゲームやエピソードにも注目！

今号でも引き続き、全キャラクターを自由に編成して進めていく攻略型コンテンツ
「真・夢幻回廊」において、強敵“守護魔獣”を撃破することで
解放することができる「ミニゲーム」や「エピソード」の情報も到着！　その詳細を見ていこう！

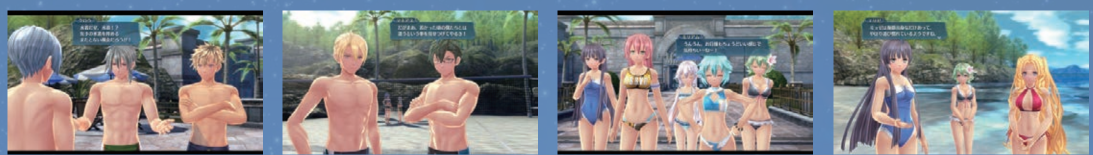
ミニゲーム1　《軌跡でポン！ -ベリル編-》

『空の軌跡 The 3rd』でも好評を博したクイズゲームがここに復活！　今回司会進行を務めるのは、《身喰らう蛇》カンパネルラではなく、トールズ士官学院OGにして、ゼムリア各地を旅する謎の占い師「ベリル」。問題は「軌跡シリーズ」世界の常識から特定の国、地域に限定されたもの、更には家柄や地名にまつわるマニアックなものまで多数用意されているぞ！



ミニゲーム2　《ビーチDEバカンス》

クロスベル自治州の保養地・ミシュラムにあるレイクビーチを舞台にしたコンテンツ。「スイカ割り」や「バナナボート」といったミニゲームが楽しめるほか、キャラクターを誘うと特殊な「コミュニケーションイベント」を楽しむことができるのだ！　このコンテンツでは所有するMWL(ミシュラム・ワンダーランド)チケットを消費することで遊ぶことができ、チケットは探索等で入手することが可能とのこと。どんどん「真・夢幻回廊」を探索していこう！



スイカ割り

パートナーと共に挑むスイカ割り！
タイミングにあわせてボタンを押し、棒を振り下ろす場所や力加減を調整。
ジャストタイミングに近いほど高得点をゲット！



バナナボート

パートナーと共に挑むバナナボート！
バナナボートから振り落とされないように左スティックでバランスを取りながら、水上のフラッグを入手してノルマを達成しよう！



コミュニケーションイベント

お気に入りのドリンクを飲みながら、パートナーと過ごすひと時。
一定の好感度を超えると相手と更に接近する特殊イベントに発展するほか、視線を動かして見つめるポイントを変えることで、会話内容にも変化が……？



※コミュニケーションイベントはVR機能にも対応！

エピソード1　《女学院の事件簿》

災厄が過ぎ去り、授業が再開された聖アストライア女学院では、ある奇妙な噂でもちきりとなっていた。
“昏睡事件”——
アストライアに通う女学生が何の前触れもなく突然倒れ、半日近く昏睡状態に陥ってしまうというのだ。
事件に巻き込まれた生徒はすでに６人。“被害者”をこれ以上増やさないため、そして事件の原因を突き止めるため、《新Ⅶ組》に調査の協力を依頼する学生会長のエリゼ。
女学院の生徒に扮して潜入調査を開始するユウナとミュゼだったが、そこにはもう一人、蒼髪の見慣れぬ女学生がいて……？





エピソード2　《幸せの石と不幸の船》

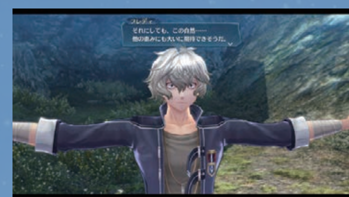
商売人・ジンゴは悩んでいた。
《ナインヴァリ・帝都支店》の開店で帝都にも進出し、更に営業範囲を拡大させることに成功したが、この先の展開には、それなりの“足”が必要だったのだ。
商売のために“足”が欲しい。だが、お小遣いが足りない。
落ち込んだ気持ちのまま仕事を続けていたある日、猟犬見習いの飼い犬・ケルベロスがどこからか奇妙な形の石を拾ってくる。
「変な石なー。」
ジンゴが手にした、奇妙な石。その日から、何故か《ナインヴァリ》に様々な人が訪れるようになり……。





エピソード3　《究極の野生飯》

オリヴァルト皇子殿下の披露宴を彩る、立食形式の料理——。
合格した者だけが披露することを許されるという、料理人のプライドと名誉をかけた審査に第Ⅱ分校一？のグルメ家、フレディが名乗りを上げた。
果たして、数々のゲテモノ料理を手掛けてきたフレディが生み出す究極の一品とは……？

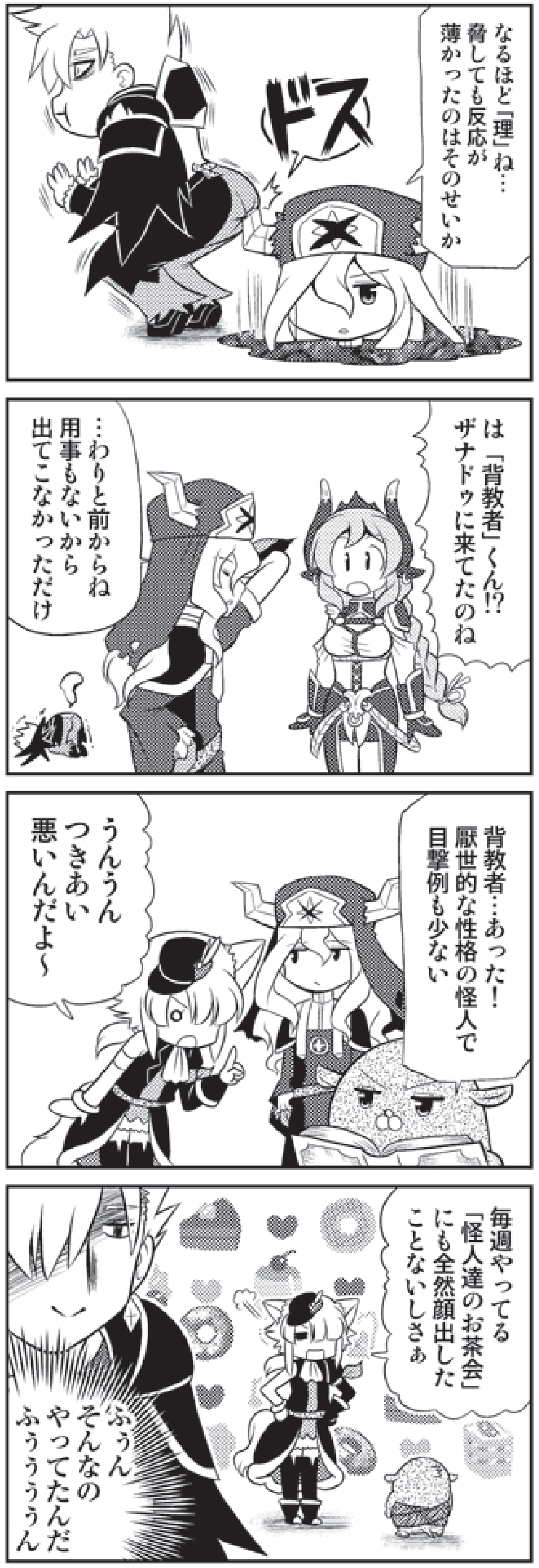

★ザナドゥにまたひとり、ややこしい人が…!★



あり得る話



つきあい悪い男



遺跡あらしと怪人



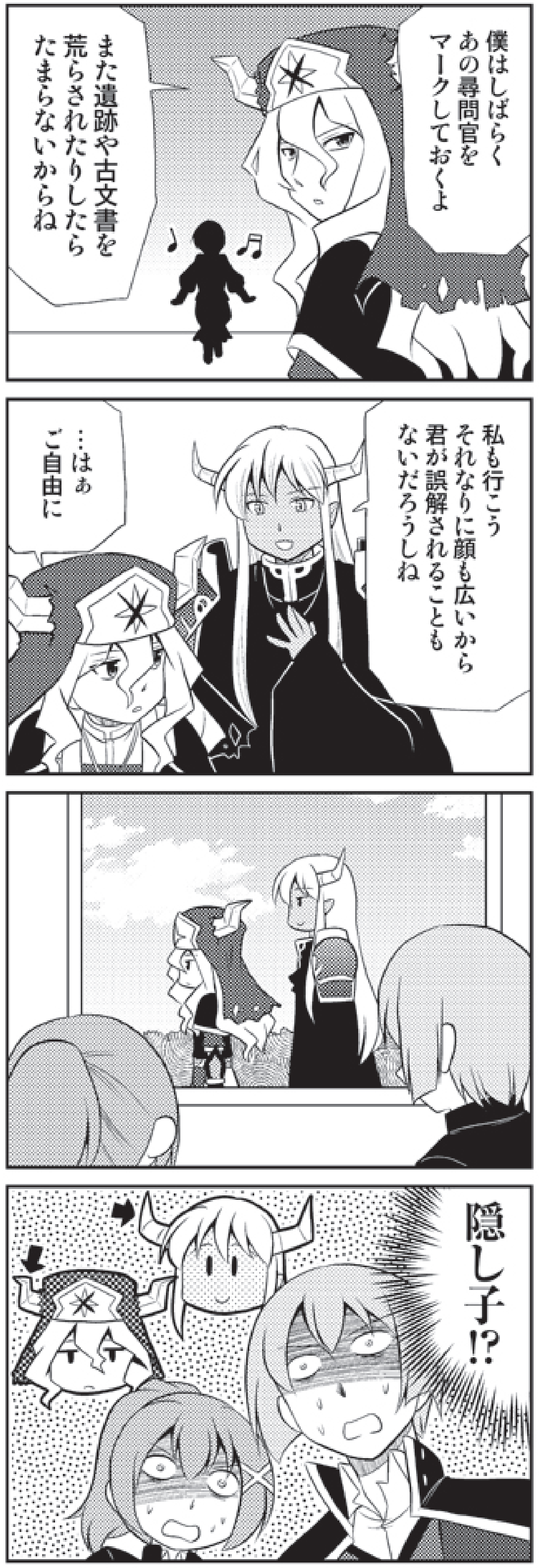
あこがれの異能



本当に悪いヤツ



誤解される人



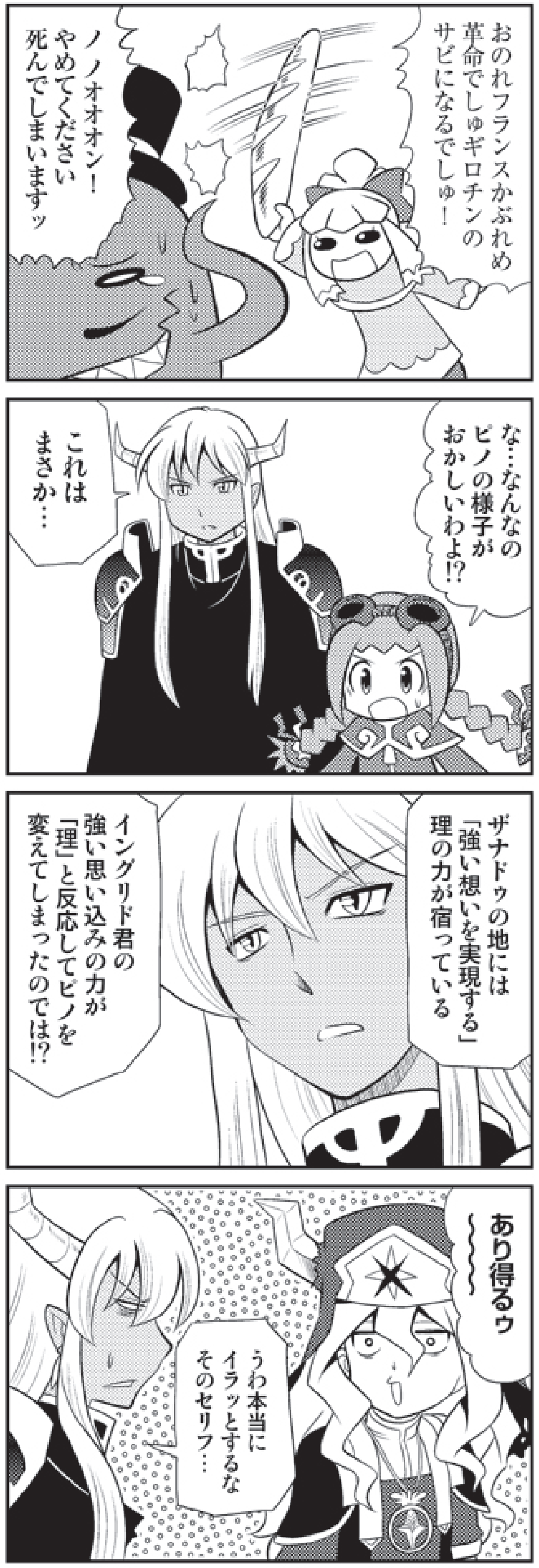
もうガマンできない



オバケの理由



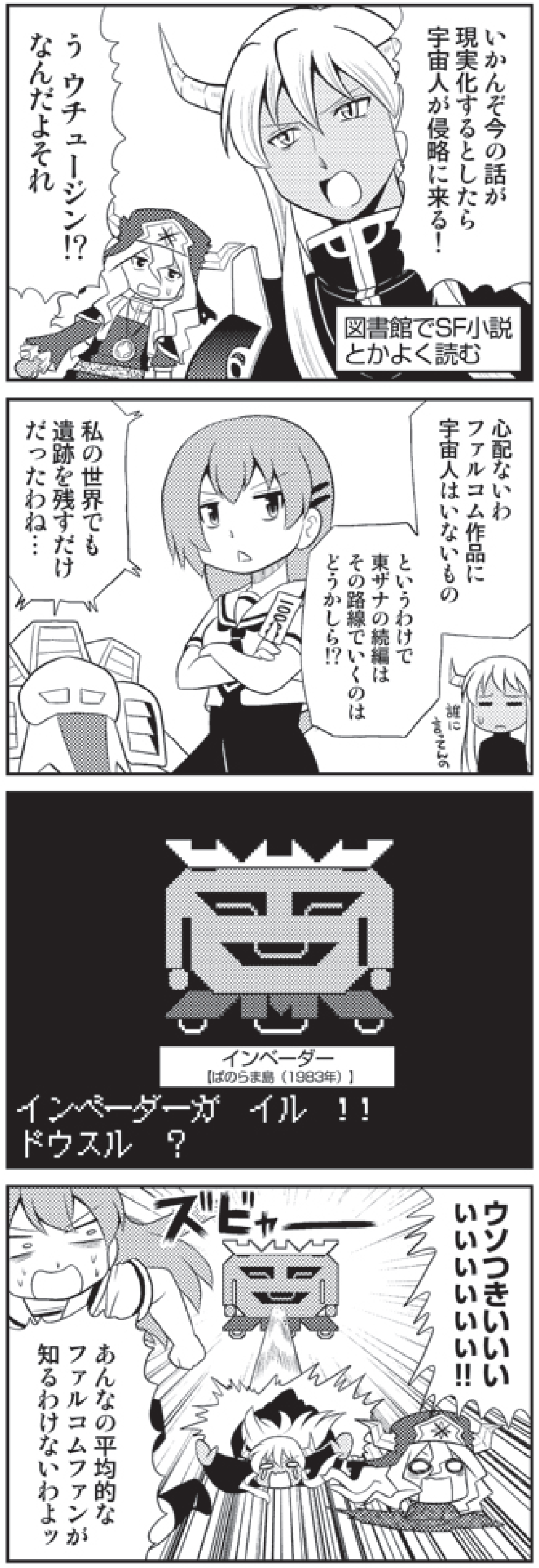
あり得る仮説



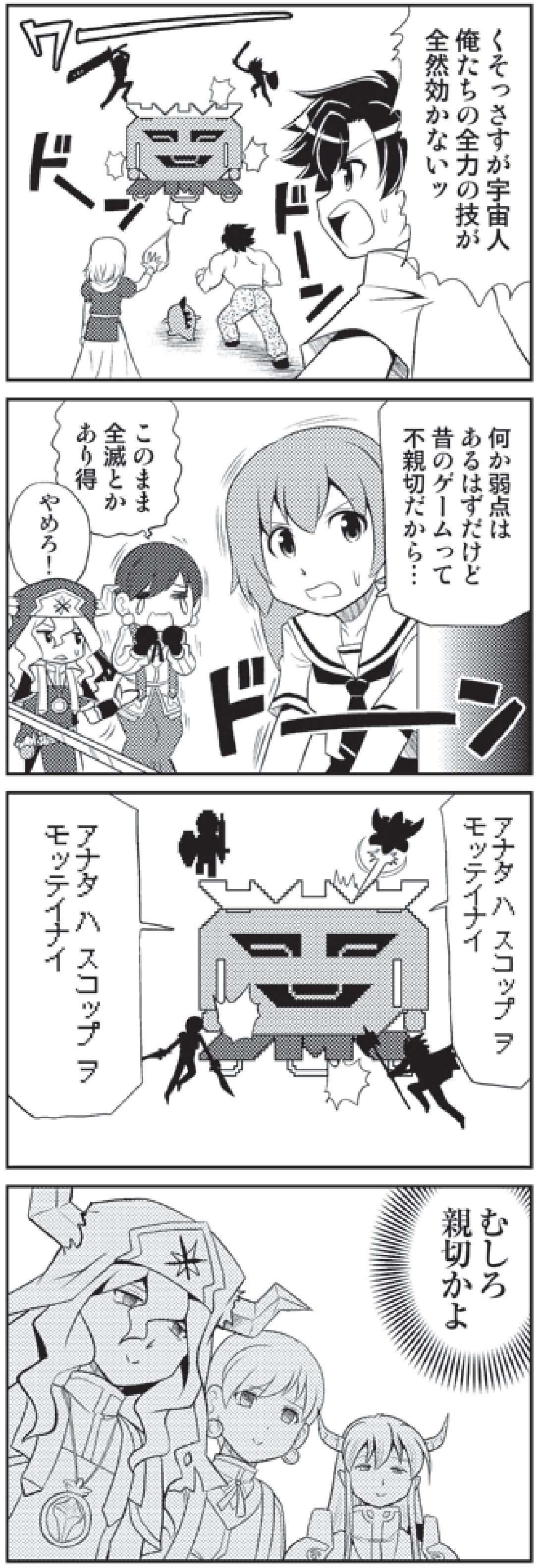
キルゴール先生のオカルト教室



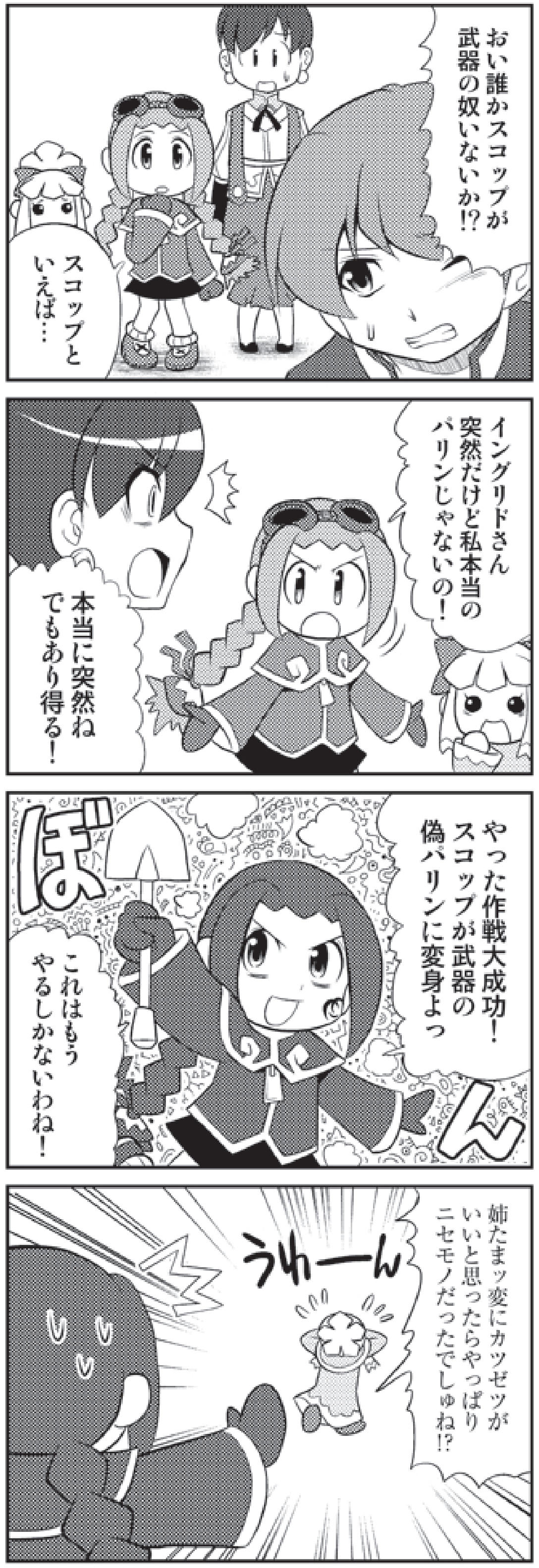
インベーダー



弱点はスコップ

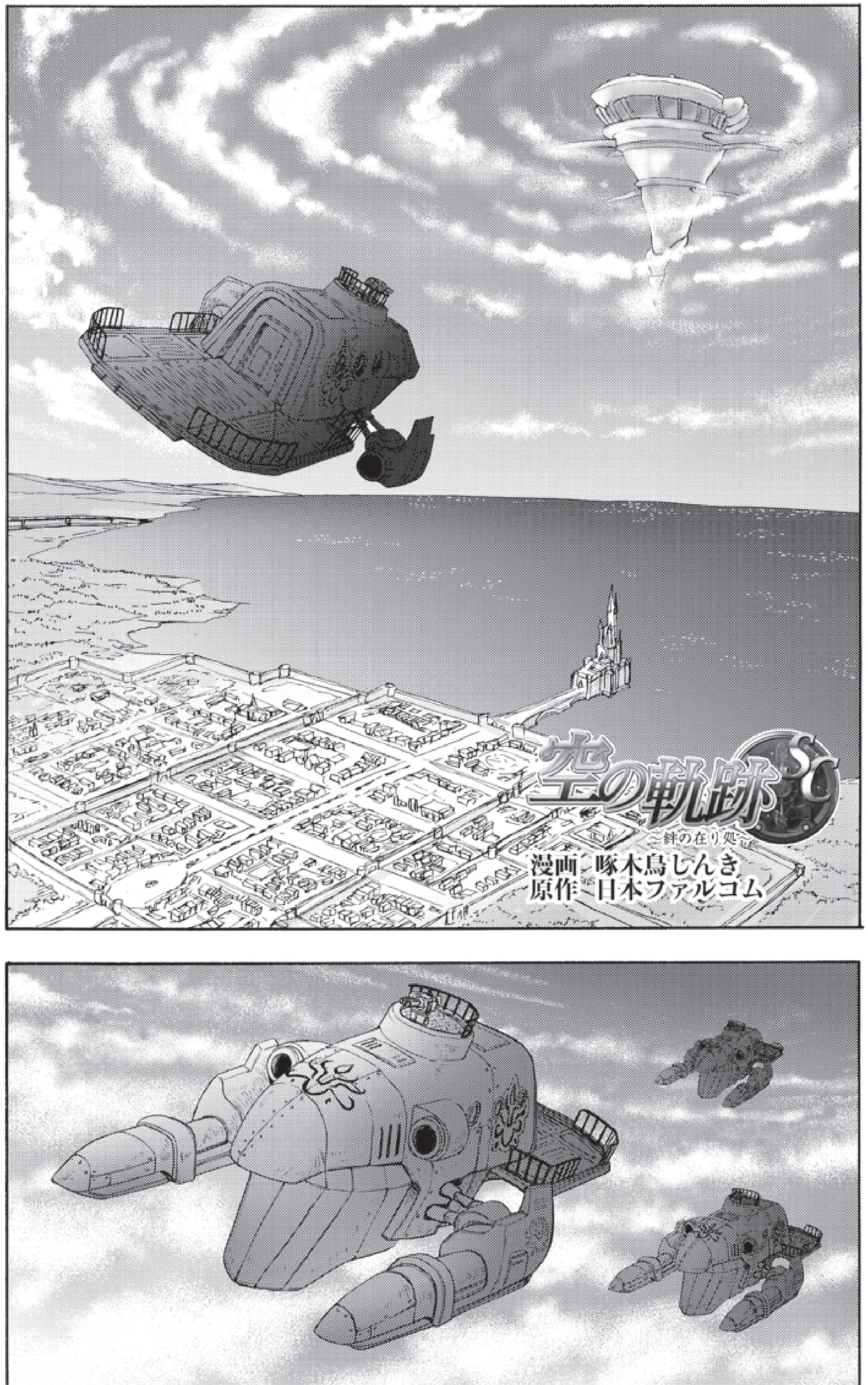


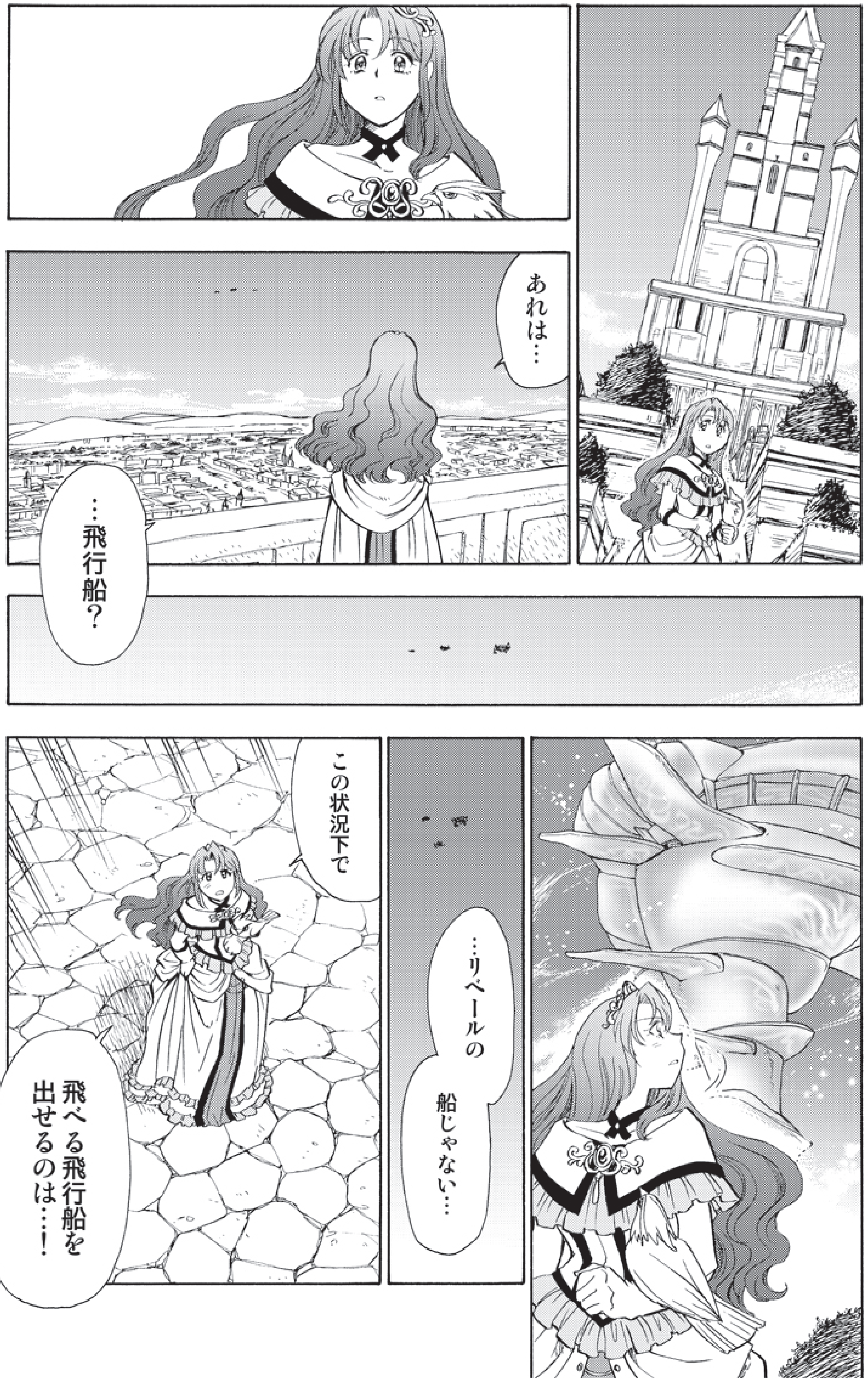
伝説のスコップ

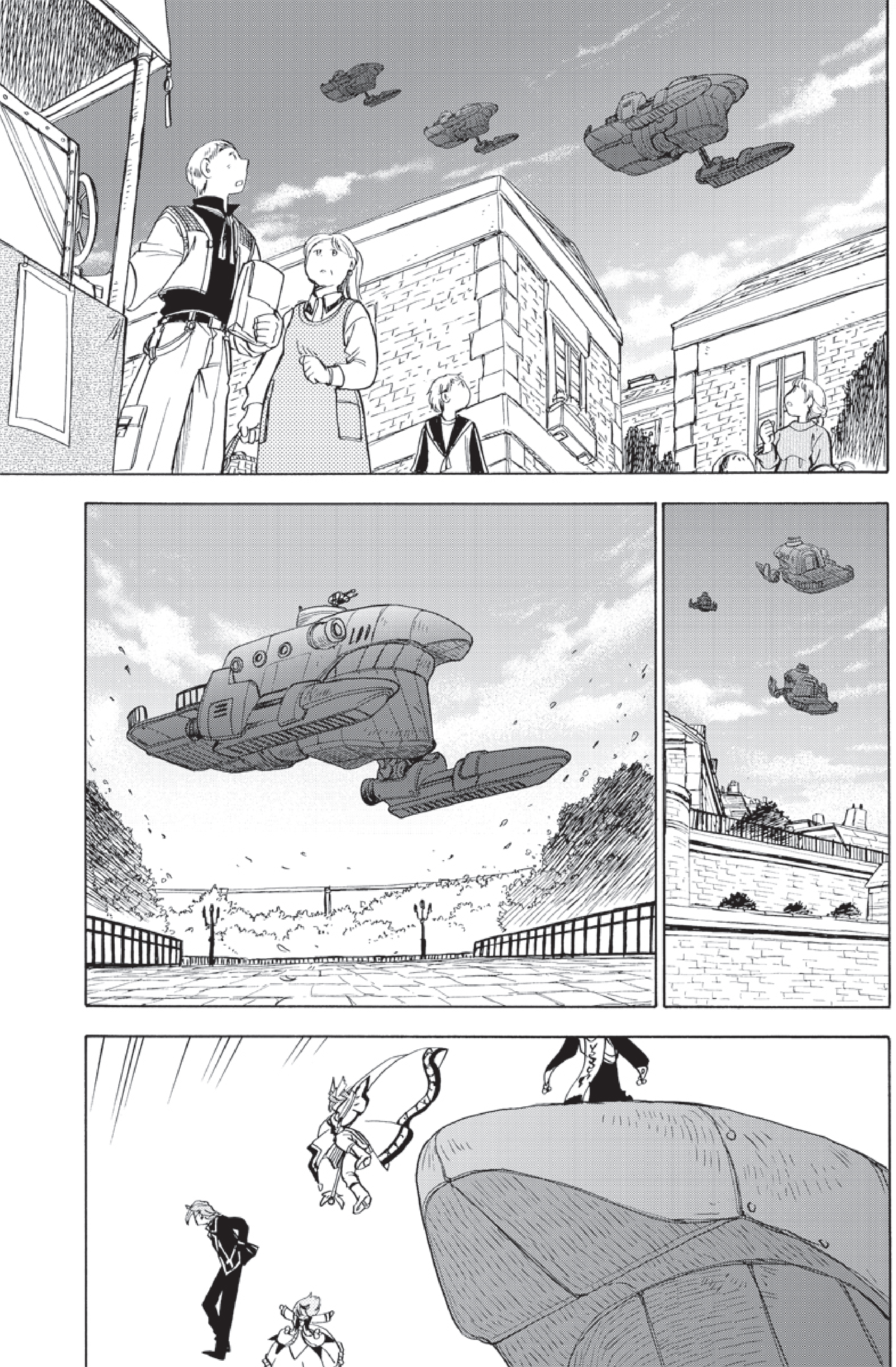


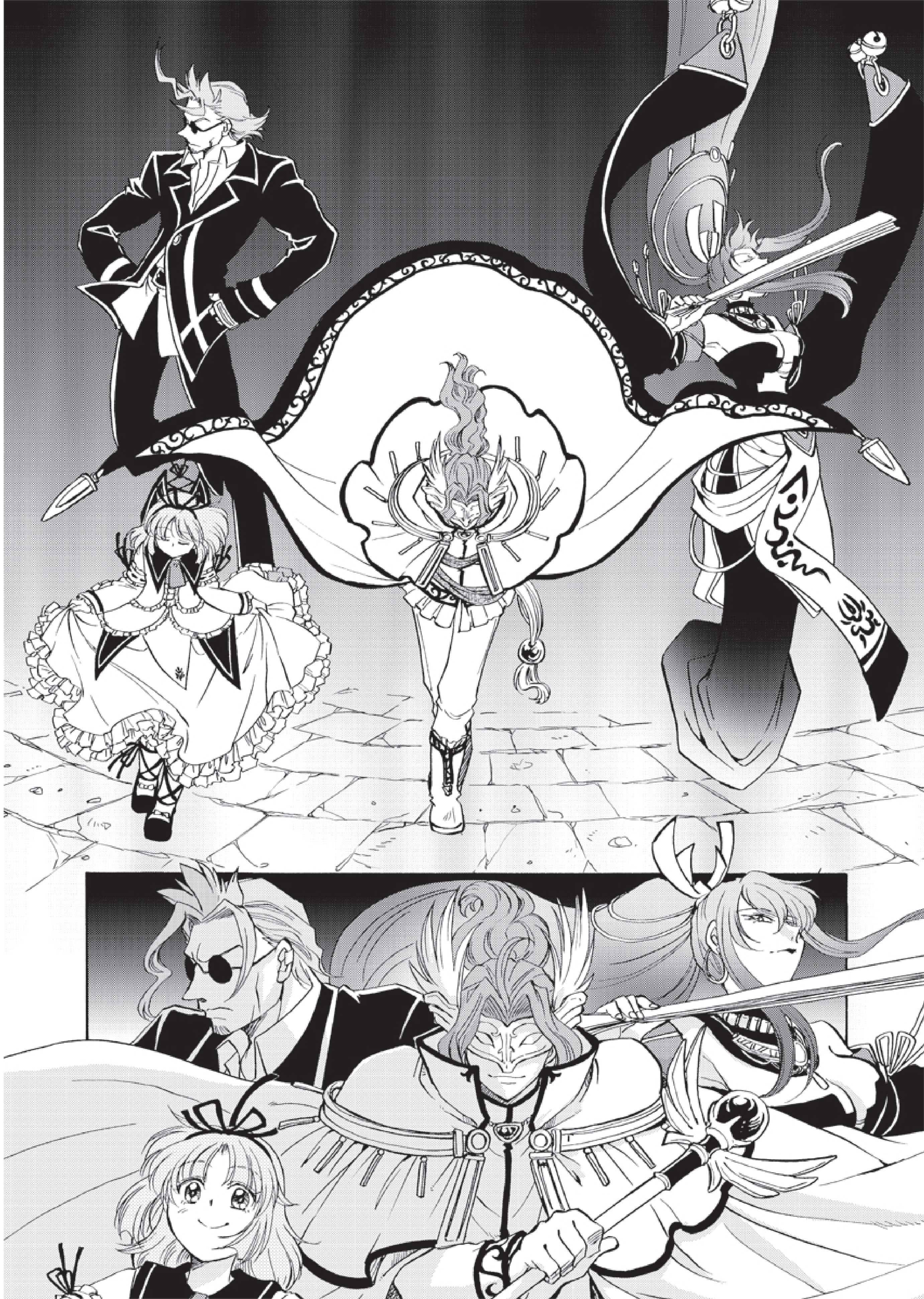
美人教師の野望




空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画　啄木鳥しんき
原作　日本ファルコム


あれは…
…飛行船？
…リベールの船じゃない…
この状況下で
飛べる飛行船を出せるのは…！





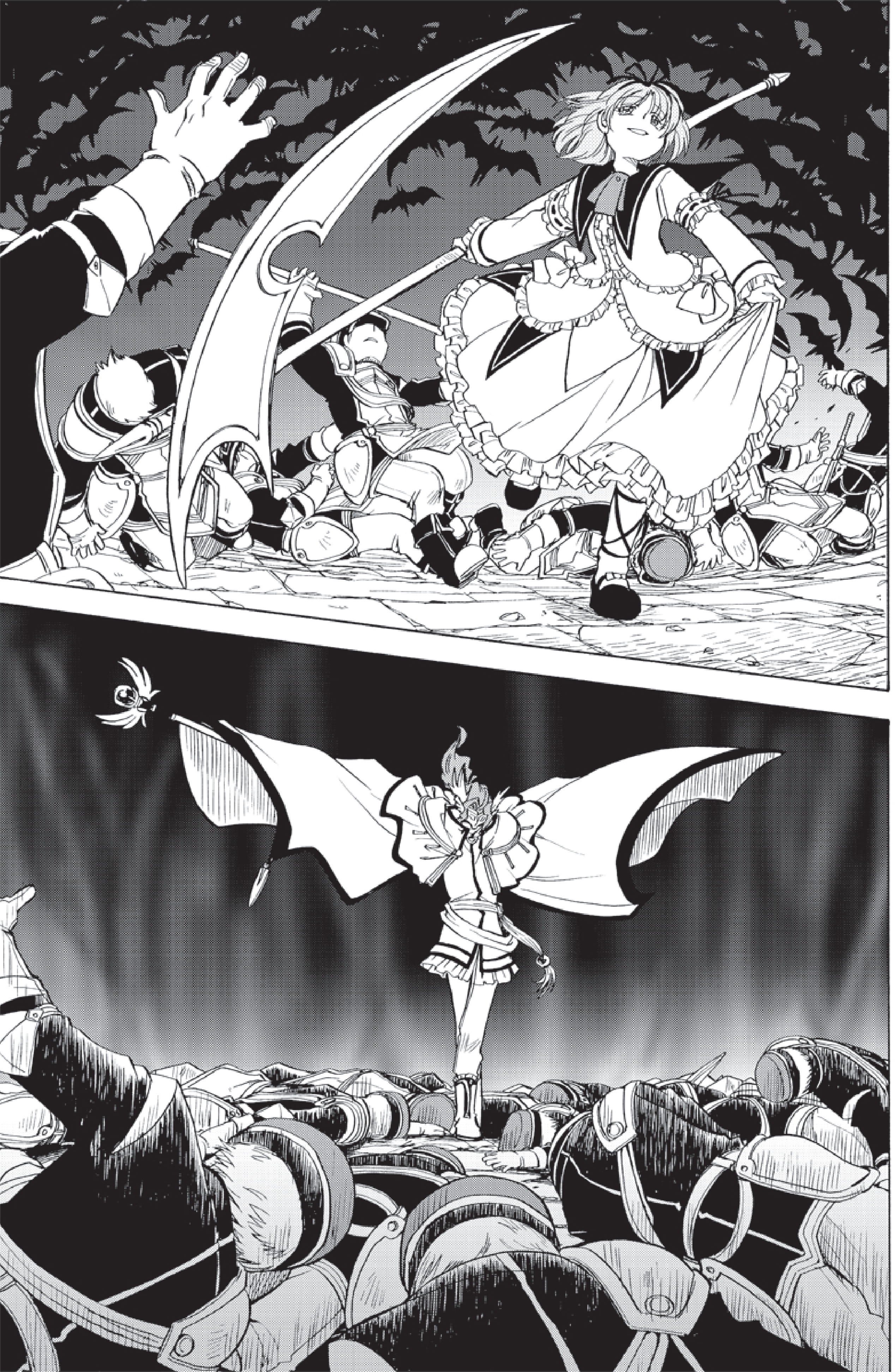


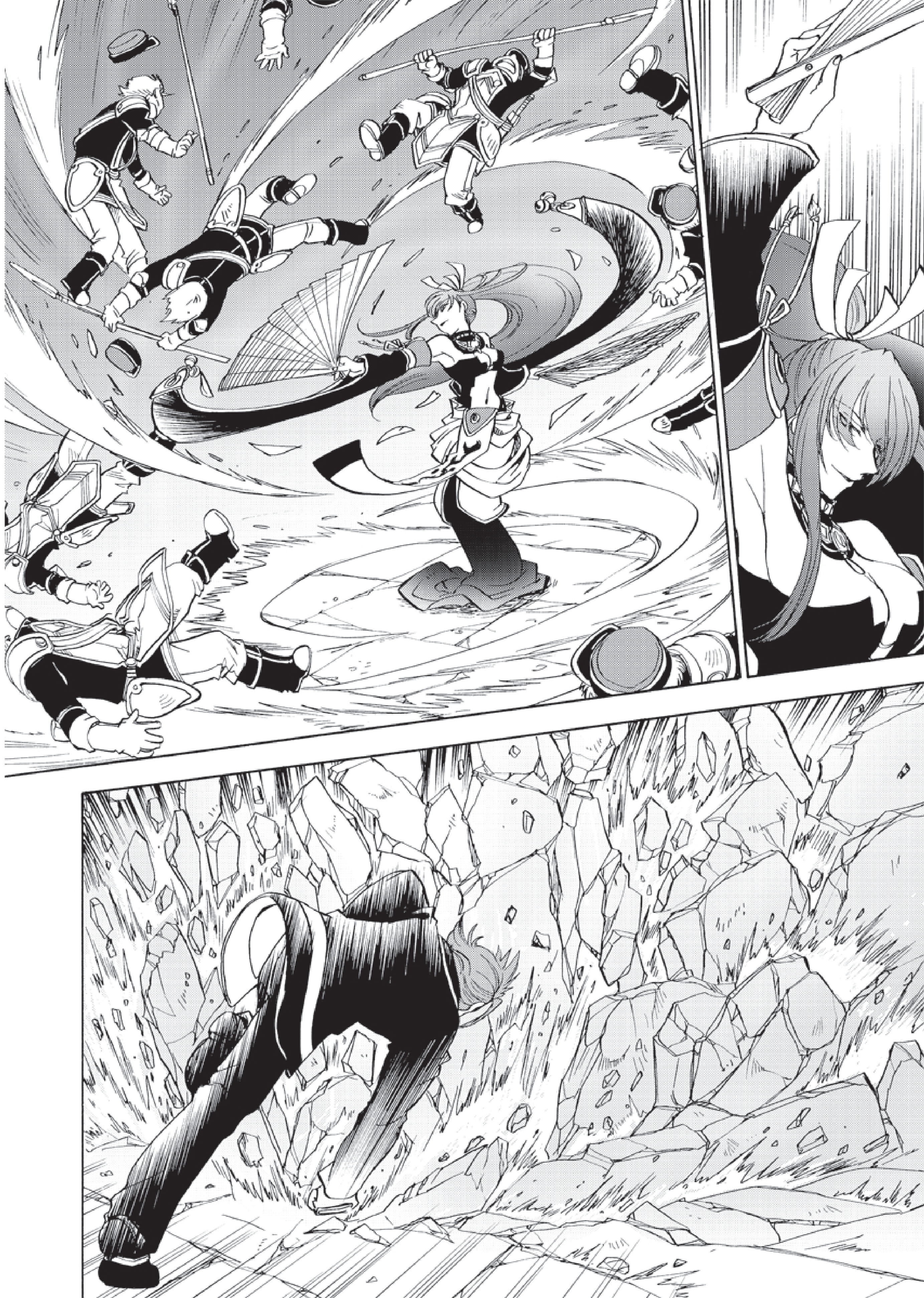
おや？
《輝く環(オーリオール)》の出現で
王都は阿鼻叫喚の様相を呈していることだろうと思っていたのだが
なんだぁこりゃ!?
ただの平和な城下町じゃねぇか！
これはまた素敵なお国柄だこと
いいじゃない
こういうのんびりしたところを…


あら？
まぁ…
貴様らは《身喰らう蛇》だな!?
貴様らがここに現れるだろうことを
我が王国軍は前もって察知していた!!
王都には
一歩たりとも踏み入れさせせん!!


フフ
平和ボケした田舎国家とばかり思っていたが
これは我らも少しばかり
敬意を示しておくべきか…
…お初にお目にかかる
我が名は《怪盗紳士》ブルブラン
クク…
《痩せ狼》ヴァルターだ


《幻惑の鈴》ルシオラ
どうかお見知りおきを
《殲滅天使》レンよ
みんなどんな声で鳴いてくれるのかしら
な…名乗りとは悠長な…
…総員構え!!
突撃!!






さて
それではゲームを始めるとしようか
くすくす
それはどうやって遊ぶものなの？


決まってんだろ
王将の首を取ったもんが勝ちだ！
ふふ
少しは楽しめるといいわね
これより我ら執行者は
グランセル城に向かう！
次回に続く



FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
もうひとつの
『空の軌跡』が始まる――
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！　©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら　www.field-y.co.jp



英雄伝説 空の軌跡SC 4
ソラノキセキSC
～絆の在り処～
結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う、誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第4巻！
やっとあたしは、ヨシュアに届くことができた。
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI　©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

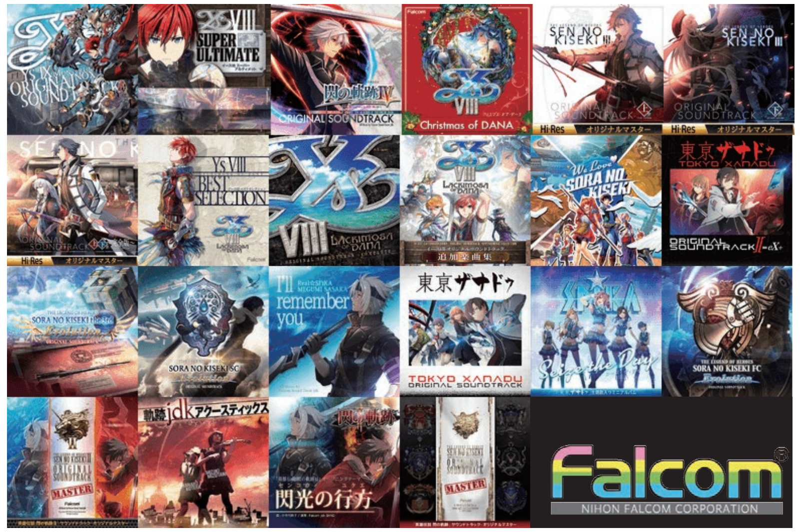
▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

イース、軌跡シリーズや東京ザナドゥのハイレゾアルバムが期間限定プライスダウン！

『e-onkyo musicサマーセール』2020年8月16日（日）まで開催中！

「e-onkyo music」にて、ファルコムのハイレゾアルバム作品が期間限定のプライスダウン！ 「空の軌跡」アレンジアルバム「WE LOVE 空の軌跡」や昨年秋に発売された「イースⅨ -Monstrum NOX- オリジナルサウンドトラック」も対象となっているので、この機会をお見逃しなく！



■セール期間
2020年6月26日（金）～ 2020年8月16日（日）まで

■セール対象商品

60% OFF
- 『軌跡jdkアクースティックス』[2,852円→1,140円]

50% OFF
- 『英雄伝説 閃の軌跡 サウンドトラック・オリジナルマスター』[3,056円→1,528円]
- 『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ サウンドトラック・オリジナルマスター』[2,444円→1,222円]
- 『閃光の行方』 [254円→127円]
- 『Seize the day』 [1,019円→509円]
- 『東京ザナドゥ オリジナルサウンドトラック』[2,750円→1,375円]
- 『東京ザナドゥ オリジナルサウンドトラックⅡ=eX+』[1,528円→764円]
- 『I'll remember you』 [1,426円→713円]
- 『We Love 空の軌跡』 [2,750円→1,375円]
- 『イースⅧ BEST SELECTION』 [1,834円→917円]
- 『イースⅧオリジナルサウンドトラック 追加楽曲集』[612円→306円]

40% OFF
- 『イースⅧ オリジナルサウンドトラック［完全版］』[3,463円→2,077円]

30% OFF
- 『英雄伝説 空の軌跡 FC Evolution オリジナルサウンドトラック』[2,444円→1,710円]
- 『英雄伝説 空の軌跡 SC Evolution オリジナルサウンドトラック』[2,750円→1,925円]
- 『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd Evolution オリジナルサウンドトラック』[2,750円→1,925円]
- 『イースⅧ Christmas of DANA』 [509円→356円]

20% OFF
- 『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ オリジナルサウンドトラック上巻1』[916円→732円]
- 『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ オリジナルサウンドトラック上巻2』[916円→732円]
- 『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ オリジナルサウンドトラック下巻1』[916円→732円]
- 『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ オリジナルサウンドトラック下巻2』[916円→732円]
- 『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ オリジナルサウンドトラック上下巻～完全版～』[3,666円→2,932円]
- 『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ オリジナルサウンドトラック』[3,463円→2,770円]
- 『イースⅧ SUPER ULTIMATE』 [3,055円→2,444円]
- 『イースⅨ オリジナルサウンドトラック』 [3,463円→2,770円]

■「e-onkyo music」サマーセール紹介ページ
https://www.e-onkyo.com/feature/4543/

夏にピッタリの「イースⅧ」など、ファルコム作品がお買い得に！

PlayStationt™ Storeにて、『SUMMERセール』を開催中！

この季節にピッタリの「イースⅧ -Lacrimosa of DANA-」のほか、ファルコム作品系５タイトルが期間限定でプライスダウン!!

■セール対象商品

- PS4「イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス」 ⇒40% OFF
- PS4「イース セルセタの樹海：改」 ⇒30% OFF
- PS4「英雄伝説 閃の軌跡Ⅰ：改 -Thors Military Academy 1204-」 ⇒30% OFF
- PS4「英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ：改 -The Erebonian Civil War-」 ⇒30% OFF
- PS4「東京ザナドゥ eX+」 ⇒60% OFF







■セール期間
2020年7月22日（水）～ 2020年8月4日（火）まで

『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ』美麗イラストを使用した最新グッズが登場！

「カーテン魂」を運営する株式会社Key-thより、『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ』の美麗イラストを使用したカーテン、タペストリー、まくらカバー、シーツ、ラバーマットなど最新グッズが多数登場！

カーテン2種


Ⅶ組 帰還


トールズ第Ⅱ分校

シーツ2種


アルティナ


ミリアム

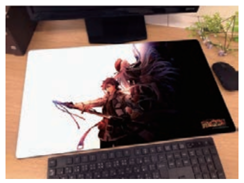
B2タペストリー


鉄血と子供たち

ラバーマット4種


帝都駅にて


プール


monochrome


帝国地図

キャラクター枕カバー 10種
（トワ／ティータ／オリヴァルト皇子／アルフィン皇女／ルーファス／クレア／レクター／エリゼ／シャロン／蒼のジークフリード）

■「カーテン魂」販売ページ
https://www.curtain-damashii.com/item/tag/senthird/



7月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
７月といえばやっぱり水着！　見目麗しい３人の美女が
衣装替えキャラクターとなって水着姿を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

水着・ミュゼ

普段から蠱惑的な言動が多いミュゼだが、ここはあえての清楚系！　ギャップを狙ってあえての選択であれば末恐ろしい限り……。

水着・サラ

大人の魅力たっぷりなサラ教官の水着姿。抜群のスタイルはもちろんのこと、サイドテールとなった髪型が、普段とはまた一味違う魅力を生み出している。

8月の新規衣装替えキャラクターは？

水着・クローゼ

姫殿下も水着姿に！　普段は露出を控えた衣装が多いだけにその破壊力は抜群だ。もちろん水着姿になっても気高さは失っていません。

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

『創の軌跡』の発売を記念して

『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

英雄伝説 空の軌跡2 ～黒のオーブメント～

第1回



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品。ということで今回からはシリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズの第２巻を連載スタート！

製品情報

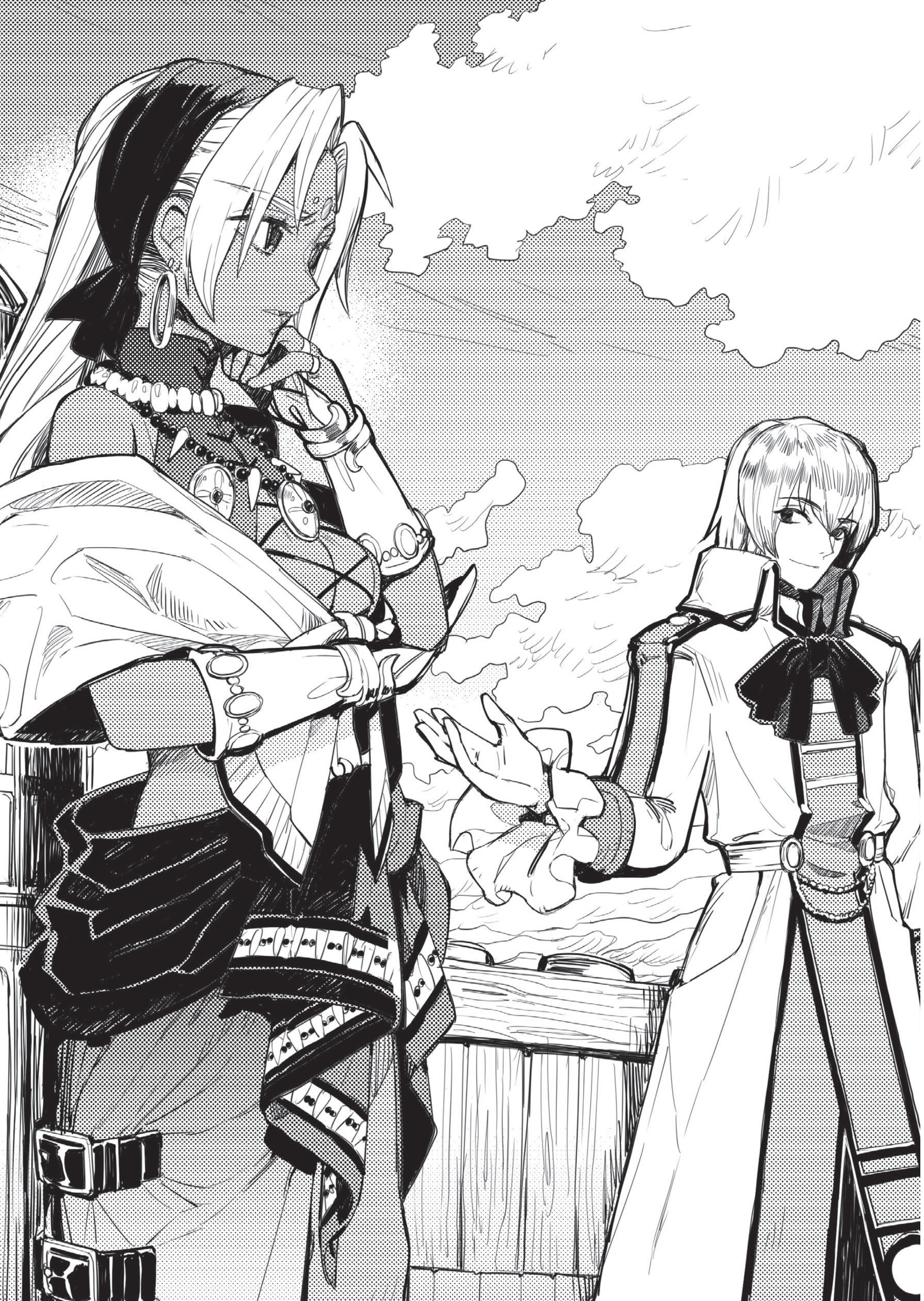
好評発売中

著　　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,200円(税別)

幕間

空をゆく飛行船の甲板の上。
金の髪を風に躍らせながら、ひとりの青年が手すりに背中を預けて呟いている。
「そう。空賊たちの正体は、没落したカプア家の連中だったってわけ。まさか、リベールに流れついてきているとはね」
囁くような声だが、話しかけている相手は目の前にいない。
金髪の青年の口許をよく見れば、手の中に納まるほどの小さな機械を持っている。
それは、信じられないほど小型の導力器だった。
彼が声を発する度に、機械に埋め込まれた爪の先よりも小さな結晶——七耀石(セプチウム)がチカチカと瞬いた。結晶が声を導力波に変換しているのだ。喋り終わると、今度は隣の結晶が瞬く。それに応じるように導力器から声が漏れてきた。
風に雲が流れていく。
眼下には、リベール王国の山並みが見えていた。
ボースからロレントへと至る空の道からは北部山岳の雄大な眺めが見渡せたが、青年は景色には関心がないようで、ちらりとも視線を送らない。
「……うん、そう。彼には会えなかった。まあでも収穫はあったよ。料理も酒も美味かったし、

美人ともお知り合いになれたし、可愛い子ともお近づきになれたし。リベールには珍しい、黒髪の……ね。おっと焼かないでくれよ」
返ってきた返事は激しいものだったようで、金髪の青年は思わず機械から耳を離した。
「うん……うん……判ってるってば。そんなにおっかない声で怒鳴らなくてもいいだろう。ボクの繊細な耳が壊れてしまうよ。ああ、ボースから今はロレントに行くところさ。そっちもくれぐれも用心しておくれ。宰相殿に気づかれるな。また連絡するよ……親友」
そう言ってから青年は七耀石を指でなぞった。
かちり、と駆動終了を知らせる小さな音が鳴る。
「フフ……相変わらず、からかいがいのある男だな。可愛いねぇ」
「ふうん。携帯用の小型通信器とは、洒落たものを持ってるじゃないの」
掛けられた声に、青年は思わずぎくりと身をすくめた。
ゆっくりと顔を向けると、甲板から船室へと至る扉の影から、銀髪の美女が姿を現した。
「シェ、シェラ君……」
「ツァイスの中央工房ですら実用化できていないシロモノを持っているなんて、侮れないわね、オリビエ・レンハイム。いえ、……帝国の諜報部員さん」
「ああ……、やっぱり気づいていたんだね。さすが、《銀閃》のシェラザード……だから、ボクと飛行船に乗ったのかな？」



オリビエとシェラザードは、エステルたちと別れてロレントへと戻る飛行船に二人一緒に乗ったのだ。エステルは、ずいぶんお互いが気に入ったのね、などと妙な勘違いをしていたようだが……。

「そうね。道化ゴッコはもうお終い。洗いざらい話してくれれば痛くはしないわよ?」

愛用の得物をちらつかせつつシェラザードが言った。

「話せと言われてもねぇ……」

オリビエは肩をすくめると、苦笑いを浮かべた。

「ボクは道化ゴッコを演じていたつもりはないんだ。この性格はいわば地でね。ただ、都合が良いので隠してないだけさ。みんな油断してくれるし」

今度はシェラザードが肩をすくめた。

「それを信じろと?」

「まあ、ご自由に。あと、もうひとつ訂正がある」

「……?」

「これだよ。この導力器（オーブメント）は帝国製ってわけじゃない。帝国領土内で出土した古代遺物（アーティファクト）なんだ」

「古代遺物（アーティファクト）……」

七耀教会が管理しているはずの聖遺物を個人所有しているのだと言い張った。

「忙しい身には何かと重宝するのだよ」

「あんた……いったい」
「何者なのか、って訊きたそうだね。残念ながら、それには今はまだ答えられない。立場としては確かに帝国の諜報員のようなものだ。けれど、ボクがリベールに来たのは、工作を仕掛けたり、極秘情報を盗むためじゃない。人に会いに来ただけなんだ」
「人に……？」
「そう。君もよく知っている人物にね。その男は《剣聖》と呼ばれている」
シェラザードの顔色が変わった。
「ということは……」
「そうさ。剣士にして軍師。大陸に五人といない《Ｓ級》の称号をもつ遊撃士。ボクが会いに来たのは——《剣聖》カシウス・ブライトだよ」
まさか、行方不明になっているとは思わなかったけどね。
風が涘ったその言葉を、シェラザードは辛うじて聞き取った。

2章　白き花のマドリガル

第八幕　《重剣》のアガット

峠の坂を登りきると、目の前に四角ばった無骨な外見の建物が姿を現した。
街道を塞ぐようにして建っている曲線を排した実用一点張りのそれは、灰色の石を積み上げて造られたボースとルーアンとを分かつ関所だった。
「あれを越えたらルーアンだよ。今夜はあそこに一泊することになりそうだね」
「ねえ、ヨシュア。日も落ちてないし、一気に山を越えて麓の宿屋に泊ったほうがよくない？」
エステルは空を見上げながら言った。
まだ空には青さが残っている。
「途中で日が暮れたらどうするのさ。夜の峠越えは危険だよ。魔獣に襲われて闇雲に逃げて崖から落ちる可能性だってあるし」
「そ、それは確かにイヤかも」
エステルとヨシュアは関所の門番をしている兵士に声を掛けた。自分たちの名を告げながら、徒歩で旅をしているのだと伝える。
「ほう、歩いて王国を周ろうって？」
「うん、修業も兼ねてね」
「その心意気が気に入った！　若いうちはそうでなくちゃいけねえよ」
「えへへ、それほどでもー」
「ただ、さすがにこの山を越す前に夜になってしまいそうですから……」
泊めてくれないか、と二人は持ちかけるつもりだったのだが、エステルたちが言うよりも先に、衛兵のほうが言い出してくれる。
「ああ、なるほどな。いいよ、ここには旅人用の宿泊施設があるから、泊ってけ」
「やった！」
「助かります」
エステルたちは目の前の建物へと入った。中の奥まった一室に、兵士たちの部屋とは別に、旅人たちのために用意された寝室があった。
ベッドは四つ。どうやら四人までは泊れるようだ。
部屋の奥には暖炉があって、ヨシュアがすぐに薪をくべて火を熾した。山の上とあって、日が落ちればあっという間に冷えてくる。すでに肌寒いほどだった。
「あったかぁい……」
「導力を利用した暖房器も出回り始めたけど、薪を使った暖炉に温かさではまだまだ敵わないかな」
「炎って、見てると落ち着くよねぇ」
「安全に燃えていてくれる限りはね……」

ヨシュアが妙にしみじみと言った。
ノックの音がした。
扉が開き、兵士のひとりが「嬢ちゃんたち、夕食はどうする？」と尋ねてきた。兵士たちも食事の時間らしい。
「一緒に食べていいの？」
「おう。軍隊のメシでよければな！」
「ぜんぜん気にしないから！」
んじゃ、できたら呼ぶぜ、と言って兵士は顔を引っ込めた。
「ひとりひとりの軍人さんは良い人なんだよねぇ」
「それも、リベールならではだと思うけど」
「えっ？」
「なんでもないよ。さあ、今のうちに荷物を整理しておこう」
「う、うん」
ヨシュアの言葉が気になったものの、エステルは背負い袋の点検をすることにした。
携行食糧に水筒、野営のときに火種とするための固形燃料。発火装置は、摩擦を利用した簡単な仕掛けだ。遊撃士の《導力器（オーブメント）》を起動させて火の魔法（アーツ）を使用することはもちろんできるけれど、焚火に火を点けるためには大げさすぎる。

このあたりは命に直結するものたちだから常に残り数を確認しておく必要があった。
ナイフとスプーン。銅製のカップ。野外で調理をするために使うものたち。フォークはない。できるだけ荷物は減らす必要があったし、いざとなればナイフで代用できる。
ロープやクサビ、小型のハンマーなどは、遺跡探索用のセットだ。
衣服の替えも少しだけれど持ってきている。
街で交渉などをこなすときのためには、さすがにそれなりの格好をしていないとまずい。あまりないことだとは思うけれど、ボースのときみたいに名士と会う可能性だってある。
だが旅の空の下では、やはり衣服は二の次になってしまう。
それでも飛行船による輸送が始まってから、この手の苦労は減ったのだ。いらないものは箱に詰めて故郷に送ってしまえばいい。必要になれば街ごとに買い直せる。ミラさえあれば。
「でも、あんまり汚い恰好をしていると、ホテルに泊めてもらえなくなったりして」
ふとつぶやいた言葉にヨシュアが反応した。
「高級ホテルだとありうるかもね。そういう店では、立派な服を着ていないと入れてくれないこともあるって言うし。でも……気にしなくていいと思うけど」
そう言ってから、ヨシュアはちらりとエステルを見て、
「気にしなくていいと思うよ」
繰り返した。

「どーいう意味よ！」
「何も言ってないけど？」
「どうせ、あたしは高い服なんてそもそも似合わないわよ！」
「だから何も言ってないってば」
「おうい。メシができたぜ！」
割って入った声に、エステルとヨシュアは思わず顔を見合わせる。
「今、行きまーす！」
声を返しておいてから、慌てて荷物を詰め直す。ヨシュアとともに廊下に出て、待っていてくれた兵士と食堂へ向かった。
軍隊の料理だと謙遜していたが、食事は充分美味しくて、食べ終わる頃にはエステルはヨシュアに突っかかっていたことなど忘れてしまった。
泊り部屋に戻って寛いでいたら、ノックの音がして、この関所の副長をしているという男が顔を覗かせた。
もうひとり客が来た、相部屋でいいかと尋ねてくる。
「もちろん！」
応えてから、エステルは気づいた。すでに日は落ちて外は真っ暗になっている。ヨシュアもほぼ同時に気づいたらしい。

「こんな夜中に客ですか……」
「嬢ちゃんたちの同業者だよ」
そう言って顔を引っ込める。
入れ替わるように扉が開いて、その男が入ってきた。
「フン……。オッサンのガキどもだったか」
「あ、あんた……」
「《重剣》のアガット……」
むっつりしたまま空いたベッドを見つけると、背負った巨大な剣を壁に立てかけてから、荷物をどかっと床に放り出した。
「あんた、メシは？」
「食った。寝床だけ貸してくれればいい」
そう副長に言い返すと、ごろりとベッドに横になる。腕を頭の後ろで組んで目を瞑った。
副長が苦笑を浮かべながらも、じゃあ、仲良く頼むぜと言いおいて去っていった。
「ちょ、ちょっとあんた」
無愛想にもほどがある。
だが、エステルが文句を言う前に、アガットのほうが口を開いた。
「おい、シェラザードはどうした？」

「シェラさんはロレントに帰りました。今は僕たち二人だけです」
　ヨシュアが答えた。
「正遊撃士を目指して王国内を周ろうと思っているの。修業を兼ねて自分の脚だけで旅しているってわけ」
「呑気なガキどもだな」
　そっけなく言われて、エステルはかちんと来た。
「ちょ、ちょっと待って、それはまずい」
　問答無用で背負い袋を今にも投げつけようとしていたエステルをヨシュアが止める。
「あの……アガットさん……」
「おまえら……自分たちが一人前だなんて勘違いしているんじゃねえぞ」
　アガットが目を閉じたまま言った。
「ど、どういう意味よ！」
「ルグラン爺さんから聞いたぜ。だが、空賊逮捕くらいでいい気になるなって言っているんだよ。おまえたち、その事件をシェラザードの手を借りずに解決できたか？」
「そ、それは……」
「確かに難しかったと思います」
「だろうな。それを忘れて浮かれんなってのさ」

「う、浮かれてなんて……。あんたの方こそ、こんな時間に峠越えなんてしちゃってるくせに！　途中で日が暮れたらどうするつもりだったのよ。夜の峠越えは危険なのよ。魔獣に襲われて闇雲に逃げたら崖から落ちた、なんて可能性だってあるんだから！」
　エステルは一気にまくしたてた。
　半分以上はヨシュアからの受け売りだったが、それはそれでこれはこれだ。
「アホ、鍛え方が違うんだよ。物見遊山と一緒にすんな。こんな時間にココにいることになったのも仕事だ」
「仕事？　遊撃士のですか？」
　ヨシュアが聞きとがめた。
「ああ、お前らのオヤジに強引に押しつけられた……」
「え……？」
「父さんが押しつけた？」
　耳を疑う言葉に、一瞬エステルとヨシュアは言葉を失い——。
「明日は早いし、寝かせてもらうぜ」
　そのまま壁に向かって身体を横にすると布団を引き寄せた。
「ちょ、ちょっと……まさか、父さんと会ったの？　ねえ、あの極道オヤジってば、いったいどこにいて何をしてるのよ！」

「そこまで言いかけて黙ると、故意だとしか思えませんよ……？」
ヨシュアが言ったが、アガットはわざとらしい寝息を立てるばかりで、振り返りもしなかった。どうあっても、それ以上はしゃべるつもりはない――ということらしい。
エステルはため息をついた。
(気になるじゃないのよ……)
ハイジャックから逃れたことまでは判っていたが、エステルの父の行方はいまだに杳としてしれないのだ。
どこにいるのか。
なぜ連絡をしてくれないのか。
何も判っていない……。だからこそ何か知ってそうなアガットを問い質したい。
だが、どうにもならないようだ。わざとらしかった寝息は静かなものへと変わり、どうやらアガットは本当に寝てしまったらしい。
「うー。むしゃくしゃする！　あ、せめて、顔にラクガキくらいしてもいいよね。安眠できると思うんだけど。主にあたしたちが」
「止めなさいってば……」
仕方なくエステルとヨシュアも休むことにした。

その数時間後、関所を魔獣の群れが襲った。

† † †

アガット・クロスナーは、目を覚ますやいなや、立てかけてあった剣をつかんだ。
眠気はとうに覚めている。
静寂を破ったのは、頭に突き刺さるように響く甲高い笛の音だった。
高音部で貼りつくように鳴りつづける高い音は、関所で寝ていた男たち女たちを残らず起こしてしまうほどで、それは危急を知らせる合図なのだ。
「な、なに!?　なんなの!?」
「何かあったみたいだね」
カシウスの子どもたちが付いてきたそうな瞳を向けてきたが、アガットは無視した。
遊撃士に成りたてのひよっ子なんかは役に立たない、と思ったのだ。
思いたかった――というのが本音かもしれない。
「おまえたちは寝てろ！」
言いおいて、アガットは部屋を出た。
廊下を駆けつつ、周囲の様子を窺う。関所の建物は、街道を塞ぐように建てられた細長い造

りで、出入り口は、ボース側とルーアン側にそれぞれひとつずつ存在する。
笛の音はボース側から聞こえてきた。
関所に駐留している兵士たちが、それぞれの持ち場に着くために走っていた。
笛の鳴った現場へと走っている兵士は四人。見張りは二人いたはずだから、計六人。ひとまずそれで片がつく――と指揮官は判断したのだろう。
国境の関所でもない限りは兵士の数もさほど多くはない。
共に並んで駆けた。
ボース側の街道へと続く扉を開ける。
闇が濃い。
どうやら、月は雲に隠れているようだ。それとも地平線の下にすでに沈んでしまったか……。
扉の左右には導力灯が輝いている。
明かりの前で、兵士が二人、松明を握っていた。燃える炎の先端を闇に向かって突きだすようにして構えている。明かりがあるにも関わらず、わざわざ松明を使うということは……相手は人間ではなさそうだ。
扉の前には半円状に広がる空き地があって、その先に街道が続いている。左右は森になっていた。
アガットと並走してきた部隊の隊長らしき男が叫ぶ。

「報告せよ！」
「狼どもです！」
松明を振って、闇の一角を指し示した。
隊長とともにアガットも闇に眼を凝らす。やや右手の、森の木々が密になっているあたり。
導力灯の明かりを返して、炯炯と光る眼がいくつも見えた。
「魔獣どもめ……」
隊長が吐き捨てるように言った。
光る瞳の数から推し量ると、六匹ほどはいる……。
ばたん、と背中の扉が開いた。
荒い息とともに声が聞こえてくる。
「加勢するわ！」
振り返ると、案の定、カシウスの子どもたちだった。
「コラ、やめとけ」
「な、なんでよ！」
アガットに向かって突っかかってくる。威勢のいいことだ。
「こいつらに任せとけって言ってるんだ」
「彼の言う通りだ。これは我々の仕事さ！」

隊長が言って、腰の剣を抜き、目の前に掲げて叫ぶ。
「隊列を組め！　迎え撃つぞ！」
部下たちが隊長を中心とする扇の陣形をとる。
得物を構えた。
アガットの見たところ、練度は充分だ。構えから推し量れる腕前も悪くない。どうやら、こいつらだけで片付きそうだな、とアガットが安心した瞬間だった。
笛の音がもうひとつ聞こえてきたのだ。
建物の反対側——ルーアン側から。
「ちぃッ！」
アガットは踵を返して扉から建物の内へと戻る。
兵士たちが狼たちと戦い始めるのと同時だった。彼らの加勢は期待できない。残るは関所の中の予備の兵士たちと、ルーアン側の見張りだけだが……。振り返ると、戦っていたはずのひとりが戦列を抜けてアガットの後ろを走っている。伝令か。
部屋のひとつに飛び込むと、何か叫んだ。新たな指示を仰ぐために報告したのだろう。
その間に、アガットは反対側の扉へと辿りついていた。指揮系統に縛られないから、場合によっては兵士たちよりも素早く動けるのが遊撃士の利点である。
扉を開けて外を見る。地面に倒れた見張りの兵士の姿が目に入った。気を失っているのか目を閉じたままだ。もうひとりの見張りは、剣を抜いて戦っていた。
「こっちも狼どもか……」
ウルルル……。
低く唸りながら闇の奥から足を踏み出してきた狼の一匹が、脚をたわめて今にも飛びかかってきそうな体勢を取っている。狙っている相手は——倒れているほうの兵士だ。
ばねのようにたわんだ脚を一気に伸ばして狼が動いた。
「させるかぁぁぁぁぁぁあ！」
アガットは背負った剣を留め金からはずすと前へと跳んだ。
倒れた兵士を庇うように割って入り、剣を振る。
あたった。
手に、魔獣の重みがかかる。
気にせず、一気に剣を振り切った。
肉を断つ感触が手に返ってくる。闇の中。黒く濁って見える血を撒き散らしながら、狼は鈍い音を立てて地面に転がった。
「ようし、まずは一匹……」
目をすがめながら、闇へと向き直る。
「さあ、次に俺の獲物になりたい奴はどいつだ？」

影の中から、残りの狼たちが姿を見せる。
八匹だ。先ほどからずっと見張りの兵士と戦っているやつもいるから、ぜんぶで九匹か。ボース側よりも多い。
「チッ……。ずいぶんと盛大な出迎えじゃねえか。しかも……」
じりじりと円を描くようにしてアガットを囲んでくる。
「いくらか知恵が働くようだな」
まるで訓練された兵士のような動きをする……。
一対八。
ぎりぎりか、とアガットが思ったときだ。
「加勢するわよっ！」
声とともにアガットの脇にすべりこんでくる影がひとつ。
誰かは問うまでもない。声で判った。
「引っ込んでろ！」
「邪魔にならないように手伝わせてもらいますから」
もうひとりが、小癪なことを言って、反対側に立った。
エステルとヨシュア——といったか。カシウスの子どもたちだ。
「馬鹿やろう、そんなこと言って——」

怒鳴っている場合ではない。斜め前にいた狼の一匹が突っ込んできた。
エステルに向かってだ。
いちばん弱い奴から狙う、というのが荒野の獣たちの習性だからだろう。誰に教えられなくとも、女と子どもから狙ってくるものなのだ。
「くそっ、言わんこっちゃ——」
エステルを庇おうとするが、狼はアガットが動く前に飛びかかった。だが——。
「なんだと⁉」
アガットは目を瞠った。
襲い掛かってきた狼を、エステルは身体を捻る動きだけで避けると、自らの回転の勢いをそのまま利用して、持っていた長い棒——棍——の先端を狼の脇腹へと叩き込んだ。
ギャンッ、と狼が悲鳴をあげる。
いったん後ろに逃げようとした。
その身体に青い水の塊がぶつかって弾ける。
《アクアブリード》！
魔法（アーツ）だ。
誰がやった⁉
驚いて視線を左右に走らせるアガットの目に、倒れた狼に短剣の先を向けているヨシュアの

姿が映る――こいつか！　魔法に身体の動作は必ずしも必要ではない。だが、多くの遊撃士たちは、魔法を掛ける相手に向かって剣や杖を突きだしたりする。そのほうが集中しやすいのだ。

見れば、ヨシュアの反対側の手は、自らの戦術オーブメントに添えたまま、すでに次の魔法の駆動に入っていた。指のなぞり上げる動きにしたがってクオーツが瞬く。

「エステル、次が来てるよ！」

「わかってる！」

エステルが短く応えて、棍を身体の前で水平に持つと、次の敵との間合いをとった。

この娘は、どうやら魔法に頼るより得物を振るうほうが得意なようだ。隙のない構えを見て、アガットは唸った。

見れば判る。

こいつら――意外とやりやがる。

確かに未熟な所も目につく。だが、さすがに姉弟だというだけあって息が合っていた。

一見、短剣持ちのヨシュアのほうが接近戦向きに思えるが、突っ込んでいくのはどうやら間合いの長い棒術使いのエステルのほうらしい。ヨシュアはそれを魔法で的確に援護している。

カシウス・ブライトの子、か。

「勝手にしやがれ。怪我しても知らねえぞ……俺の《重剣》でな！」

言って、アガットは目をつけていた狼たちの一匹に向かって走る。

ひときわ体格の良い狼がいるのだ。おそらく群れのボスだろう。狼たちの間に、統制した動きが見受けられるというのならば――まずはその頭をつぶす。

指揮官を叩くのは戦いの定石だ。

「うぉおおおりゃあああ！」

喉の奥から迸る叫びを狼たちに向かって浴びせかけた。

明かりを受けて輝く大剣が弧を描いて狼のボスへと躍りかかる。

《重剣》のアガットは、群れを率いる巨狼を一撃で倒してのけたのだった。

第九幕　マーシア孤児院

「挨拶もしないで発つなんて……。やっぱり失礼なヤツよね」
「まあまあ」
街道を歩きながらも怒り続けるエステルをヨシュアが宥める。
関所を抜け、エステルたちはずっと西に向かって歩いていた。二人はルーアン地方に入っている。
あの後——狼の群れに襲われ、それを撃退してから、仮眠を取って目覚めてみると、もうアガットの姿はなく、旅立った後だった。
別れの挨拶も置き手紙もいっさいなし。
共に戦った相手に対して驚くほど素っ気ない態度だと、エステルは思うのだが、ヨシュアのほうはあまり気にしていないようだった。
「でも、たいしたことなくてよかったよね」
「そうだね」
倒されていた見張りの兵士の怪我も些細なもので、やや負傷した者は出たものの、それだけで済んだ。
アガットのおかげだろう。《重剣》のアガットの名は伊達ではなく、改めてエステルたちは感心してしまった。ひとりで半数近くの狼を倒していたのだ。
戦いが終わった後、ちらりと兵士のひとりが気になることを言っていた。
今までこんなに大勢の狼たちが一度に攻めてきたことはない、と。関所の入り口に取り付けられている導力灯には魔獣を寄せつけない効果があって、今までは飢えに耐えかねて襲ってきても、二匹から多くて三匹というところだったそうである。
気にはなったが——そういうこともあるだろうさ、と言われると、そんな気もしてくる。
峠の道は山肌に巻きつくようにして緩く曲がりながら登っていた。
登りきると、いきなり視界が開けた。
青い水平線が目に飛び込んでくる。
「海だよ、ヨシュア！」
「はいはい。叫ばなくても聞こえているし、見えているってば」
エステルとヨシュアはとうとう大陸の西の端までやってきたのだ。
街道は、そのまま海岸沿いを南へと下っているようだった。つまり、しばらくはずっと右手に海が見えることになる。
「海って、小さい頃に定期船に乗ったときに、上からちらっと見たことあるだけなのよね。こうして見ると、ほんと広～い！」
「僕も海は久しぶりだな……」

崖の下に打ち寄せる波の音が聞こえてくる。潮の香りがエステルたちの鼻腔をくすぐった。
それらは、淡水湖であるヴァレリア湖にはなかったものだ。
「ねえ、ヨシュア」
「ん？」
「歩いてきてよかったよね！」
「そうだね」
波の音を聞きながらエステルたちは海岸沿いを歩いた。
絶え間ない波音に耳が馴れてきた頃に、分かれ道へと行きあたる。
陸はそこから西へと突き出していて、細長い半島になっているようだ。地図によれば、右に進むと、半島の先に建てられたバレンヌ灯台へと行きあたる。左が、海岸沿いにルーアンへと向かう道だった。
エステルとヨシュアは灯台には寄らずに左に折れる。
昼少し前に目の前に小さな村が見えてきた。
「マノリア村だよ」
ヨシュアが教えてくれる。
街道沿いにある小さな宿場町らしい。手前に広がる野原には、可愛らしい白い花がたくさん咲いていた。

潮の香りに花の香りが混ざっている。
「甘い匂い……なんだかお腹が空いてきちゃった」
「あはは。まさに花より団子だね。そろそろ食事のできる処を探そうか」
村に入り、エステルたちは最初に目に着いた食事処に入る。
何かお勧めの食べものはないかと店主に尋ねてみた。
「そうだな。お弁当はどうだい？」
「お弁当？」
「町の外れに風車が建っているんだけどね。見晴らしのいい展望台になっているんだよ。観光に来たお客さんたちは、お弁当を買ってそこで食べることが多いのさ」
「へえ。なかなかいいかも」
「僕たちもそうしてみようか」
エステルとヨシュアは気に入った弁当を買って外で食べることにした。
「早く行こうよ！」
扉を開けて、ヨシュアを急かす。
「エステル、前！」
「へ？」
「きゃあ！」

耳元で声がした。
次の瞬間に誰かとぶつかってしまう。
「あうっ……。いたたた。って、ご、ごめんなさい！」
誰にぶつかったか判らないが、とりあえず謝らないといけない。エステルはお尻の痛いのを我慢して声を絞り出した。
「あ、はい、大丈夫です」と涼やかな声が返ってくる。
顔を向ければ、エステルと同じくらいの年頃の女の子だった。
ショートカットで目の大きな可愛い子だ。瞳の色が光の加減か紫色に見える。
どこかの学校の制服を着ている。青い色のブレザーに、ひだひだのスカート、胸元にはひらひらした白いリボンタイが付いていた。
（あれ？　この制服って、どこかで見たよね）
少し考えて、すぐに思い出した。
ジェニス王立学園だ。
腰から小型の剣を提げているのが制服にはやや不釣り合いだが、飾り剣のひとつも吊るしていないと物騒な世の中だからかもしれない。
「ご、ごめんね。痛くなかった？　ケガしてない？」
ふるふると少女は首を振った。ゆっくりと立ち上がると、優雅にスカートの裾を払う。

「まったく何をやってるのさ」
ヨシュアがやってくる。少女の持っていたらしき花束を拾って手渡した。
「ありがとうございます。私のほうも人を探していて、よそ見をしていたものですから……」
「ん？　人探し？」
「はい。十歳くらいの男の子です。たぶん帽子を被っていると思うんですけど……どこかで見かけませんでしたか？」
記憶をさらってみたが、村に入ってからはそのような男の子は見かけていない。
「見なかったと思う」
「そうですか……。どこに行っちゃったのかしら……」
心配そうな顔つきになっている。
もういちどエステルに謝ってから、少女はエステルたちの来た道とは逆を辿っていった。

† † †

「あの子……」
去ってゆく少女の背中を見送りつつ、ヨシュアが呟いた。
「なあに、ヨシュアってば。あ、もしかして、気になるの？」

「えっ、なに言ってるのさ」
「照れないでいーのよ。一目会ったその時から、っていうし。お姉さんにどんどん相談してくれていーんだから」
「……相談っていうのは経験豊富な人にするものだと思うけど?」
ヨシュアが肩をすくめてみせる。
「どーいう意味よ」
せっかく姉としての威厳を見せてやろうと思ったのに。頬を膨らませると、ヨシュアがやれやれと呆れた顔つきになった。
「昔の……知り合いにほんの少し似ていただけさ。それでちょっと驚いただけ」
ちょっと微妙な——辛いことを思い出したような顔つきをされてしまって、エステルは何か言わなければと思ってしまった。とっさに口をついて出てしまう。
「昔の知り合いに似ている……うん、口説き文句としては、三十点ね。って、なにホントに呆れたって顔してんのよ!」
「はあ。……それより、今の制服に見覚えなかった?」
ヨシュアが強引に話題を変えた。
エステルとしても何か墓穴を掘った気分だったので、変えた話題に乗っかる。
「あー。あれよね。ジェニス王立学園」

「まあ、ルーアン地方にある学園だから、このあたりで見かけても不思議はないけど」
「へえ……あれが本物なんだ。清楚で礼儀正しくて、頭も良さそうだったし、空賊のボクっ子とは大違いだわ」
「なに言っているんだか。最初に会ったときはすっかり騙されたくせに」
「うっ……」
「そういえば、あのときもエステルってば妙な勘違いしてたよね」
「ううっ」
「勘違いして、人をからかう暇があったら、遊撃士としてもっと観察力を磨いたほうがいいんじゃないかな。さもないと——」
「判った! 判ったから! もうからかいません!」
ふっとヨシュアが笑みを浮かべる。
「よろしい。じゃ、お弁当にしようか。ほら、あそこに風車が見える」
ヨシュアが指さした。
見れば、村の南側が高台になっていて風車が回っている。鷹、だろうか。白い大きな鳥が一羽、くるくると風車の上で円を描いて飛んでいた。
村の外れに建つその風車は、いまだ現役で働いているようだ。
導力機関によってあらゆる機械が動くようになったとはいえ、風車や水車がなくなってしま

ったわけではない。小さな村では、今でも風車や水車を利用して粉を挽いたり、水を汲みあげている。

高台に登ると遠くの景色が一望できた。

「うわぁ、いい眺め！」

「海が見えるね」

目の前を遮るものがなく、崖の向こうに南に広がる海が見えた。

風車の袂には、展望台として利用できるようにだろう、ベンチが置かれていた。

ヨシュアと並んで腰掛ける。

「いっただきまーす！」

「いただきます」

包みをほどいて、エステルはさっそくお弁当に取り掛かった。

「このハム、美味しい！」

エステルのお弁当は、燻ったハムを挟んだサンドイッチだった。レタスのシャキシャキした歯ごたえに、香り高いハムの柔らかさがよく合っている。マスタードがわずかに隠し味として施されているようで、時々ぴりっと舌にくる。それがまたいい。

脇に座るヨシュアを見ると、彼のお弁当はパエリアのようだった。

さすがに海が近いだけあって、魚貝を豊富に利用している。大きめのムール貝が貝殻付きで中央にでんと乗っかっていた。その周りには、小さめのエビだの貝だのが散っている。

「サフランの良い香りがするな」

添えられていた簡易の木製スプーンですくって、ヨシュアがパエリアを口に入れた。口の中で何度か噛んでから呑み込む。見ているだけで、美味しそう。

「そのスプーンって、サービス？」

「だと思うよ。まさか、返せとは言われないと思うけど……手作りみたいだし。ほら、ここがちょっと歪んでる」

「へえ。でも気が利いてるわねー」

「そうだね」

「でも、ホント、美味しそう。あたし、パエリアってちゃんと食べたことないのよね。ねえ、ヨシュア、一口ちょうだい」

「いいけど……交換しようか？」

「うーん。でも、ほんと一口でいいんだけど。ヨシュアが食べさせてよ」

エステルとしては何気なく言った一言だった。

「食べさせてって……」

「ほらほら早く」

「それは……ちょっと」



　ヨシュアがどうしたものかという表情で、手にしたスプーンと膝の上のランチボックスを交互に見ている。
「いいじゃない。誰も見てないんだし。そんなに恥ずかしがらなくても、子どもっぽいことしたからって笑われる心配はないってば！」
「そういう意味で恥ずかしいわけじゃないんだけどな。まったく……」
　観念したのか。サフラン色のご飯にスプーンを突きたてて、ご飯と貝をいっしょにすくってくれる。貝殻はその前に外してくれた。
（わっ。いちばん大きい貝じゃん）
「いいの？」
「なにがさ？　ほら」
「ん……んぐ」
　スプーンが口から出ていくと、エステルはムール貝といっしょにご飯を噛みしめる。
「んぐ……もぐ……んんん」
　貝の身を噛むときのぷにっとした触感が歯に伝わってくる。身の中の熱い汁がじわっと口の中で広がった。出汁を染みこませた貝のうま味と、塩と胡椒と煮込んだ汁とでシンプルに味付けされたご飯が口の中で混ざる。
（美味しい〜〜〜！）

初めてちゃんと食べたパエリアは、潮の香りがこれでもかと効いていて、エステルはこの料理が好きになった。

「んぐっんん。はあ。うーん。これぞ、海岸地方の代表料理よね。ますます食欲が～～～」

「はいはい。よかったね」

「なによ、その気のない相槌は。えーい。これでも食らえっ」

　エステルは食べかけて半分になっていたサンドイッチをヨシュアの口の中に突っ込んだ。

「んぐ！　むぐ………はあ。美味しいけど、いきなり突っ込むのはやめて欲しいかな」

「ふっふっふ。お返しよ」

「それ、お返しの意味が違うよ……」

「んー。美味しかったーーーーっ！」

　紙で作られたランチボックスを畳んで、エステルは青空に向かって伸びをする。

　風車の上でくるくると回っていた白い鳥がどこかに向かって飛んでいくところだった。

「ねえ。あれ、カモメじゃないよね」

　エステルの見ていた鳥にヨシュアも気付いたようだ。

「そうだね。たぶん、鷹か鷲だと思うけど……珍しいね。白い鷹なんて」

　お腹もいっぱいになったので、エステルたちはベンチから立ち上がった。もう少しゆっくり休みたいところだったけれど、夕方までにルーアンの街に辿りつこうと思うならば、この村を

そろそろ出なければ間に合わない。

　そうヨシュアと話しながら高台から坂を下りていった。

　大通りへと戻ってきたところで、角から急に飛び出てきた人影とぶつかった。

「わっ！　あぶなっ！」

「うお。ご、ごめん、姉ちゃん！」

　今日は人と良くぶつかる日だな、と頭の片隅で思いながら、エステルは、よろけた子どもを支える。つばの短い帽子を被った、やんちゃそうな男の子だった。赤毛の下の瞳がいたずらっぽい輝きを宿している。

「ん？　帽子？　………ねえ、キミ」

「な、なに？」

「さっき、制服を着たお姉さんが帽子を被った男の子を捜していたんだけど、キミ、何か心当たりある？」

「あー、それそれ。どこで会ったの？」

「そこのお店の前だけど。どこに行ったかまでは……探してあげようか？」

　親切心で言ったつもりだったが、男の子は行き先に心当たりがあるからと言って、駆けだしていった。元気よく走りだす姿に、エステルは故郷のロレントにいた子どもたちを思い出してしまった。

（ルックとパット……どうしているかなー）
琥珀の塔で救いだしてから会っていないけれど元気でいるだろうか。
ふと気づくと、ヨシュアが難しい顔つきをして少年の背中を睨んでいた。それから顔をエステルのほうへと向ける。
「気のせいならいいんだけど……。エステル……何か失くしてない？」
「へ？」
言われて戸惑ったが、ヨシュアの真剣な顔に、身体のあちこちを触って確かめてみる。
真っ先に探ったのが財布だが、これはちゃんとポケットの中にあった。それから髪飾り、腰のベルトに通してある導力器（オーブメント）、それから……。
「んー。とくにこれと言って……」
全部あるよ、と言いかけてから、はたと気づいた。
胸元をさぐる――ない。
視線を落として確認して、血の気がさあっと引いた。
「遊撃士の紋章が……」
胸にピン留めされていた身分証代わりにもなる紋章がない。すっかり馴染んで、もはや付けていても意識にも昇らなくなっていたものだが、そういえば何か落ち着かない感じがしたのはこのせいか。

「やっぱりね……」
「……やっぱりって、えっ、どういう……まさか」
だが、そうとしか考えられない。
「ランチを食べているときまでは付いていたよ。それは僕が保証する」
ヨシュアが言った。
ということはやはり――すられた。
「子どもが持っていても意味のないものだから、イタズラ心だと思うけど……」
「イタズラ小僧、許すまじ！」
先ほどぶつかった男の子が、エステルの紋章を盗んでいったのだ！



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.114

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！





1 3名様
ゆるみっしぃのゆるふわチャーム
カバンにくっつけたり部屋に飾ったりできる、
ゆるみっしぃを3名にプレゼント!!（サイズは
足から耳まで約10cm）

2 5名様
『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ
大人気のオリジナル缶バッジを5個セットを
5名にプレゼント!（※絵柄はランダムです）

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.114プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『創の軌跡』のエピソードで特に注目したい・
　期待したいキャラクターは？
　アンケート②『創の軌跡』の「真・夢幻回廊」で組んでみたい
　パーティーは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：創の軌跡最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC
　～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　8月27日（木）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。